
スケッチブック

青い羽飾り

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スケッチブック

【Nコード】

N4654C

【作者名】

青い羽飾り

【あらすじ】

女の子の学園ストーリー（一年間をテーマに全12章構成）番外編2話合計14章夕菜のはちゃめちゃで、ちょっと切ないラブちょストーリーところは都心から少し離れた共学の学園学園に登校した夕菜は一通の手紙が下駄箱に・・・超々ベダネタから物語りは始まります

第1章 卯月（うづき）の章（前書き）

曇り空の下、玄關に張り出された大きな紙。そう、今日から彼女は高校1年生。この紙は新しいクラスという現実を希望に満ちた生徒たちに突きつけるものである。早く見たいと押し掛ける生徒たちで、その周りにはごった返していた。

第1章 卯月(うづき) の章

クラス分け

青井 「えっと??…私の名前とは……」

「A B C……」

「G H I……Y Z」

「あれ??……無い」

「私の名前が無いぞ……」

琴葉 「夕菜、おはよう」 ¥ (^ - ^) /

青井 「志保、私の……」 (; | ;)

琴葉 「どうしたの?夕菜」

青井 「私の名前がないの」 (; ^ D)

琴葉 「あるよ、どこかに絶対。よく見てみなよ」

青井 「無いんだもの、入試の時に居眠りしたのが、いけなかったのかな?」

琴葉 「はははは…そんなことないよ」 (^ O ^ *)

青井 「じゃ、お昼の時間に銅像に乗ったのがいけなかったのかな?」

それとも、噴水の水を多く出したのがいけなかったのかな?

?

琴葉 「そんなことまでしてたの……」

青井 「うあゝん!!……」 (> 3 < ;)

琴葉 「私が見てあげるよ」

青井 「……」 ドキドキ

「……」 ドキドキ

琴葉 「無い」

青井 「うあゝん!!……」 (> 3 < ;)

琴葉 「嘘だよ、H組に在ったよ。私もH組。夕菜と一緒に」

青井 「本当??本当に本当……?」

琴葉 「本当にあるよ。自分で見てみな」

青井 「本当だ！よかった」(＊、)ノ”

琴葉 「よかったね。じゃ、私は教室行くね。また、帰りに買い食いしようね」

青井 「おう！！」「私も教室行こうつと」

初めてのクラスメイト

先生 「今日から私が、このクラスの担任だ。よろしく。」

「何か質問があつたら、いくらでも答えるよ」

女生徒 「先生は独身ですか？恋人はいますか？？」

先生 「勿論、独身だ！恋人もいない」

女生徒 「キヤー！！私が立候補！ノ」¥(＾Ｏ＾)ノ

「ずるい」。私も」¥(＾○＾)ノ

緑川 「みんな静かにしろよ！！」

女生徒 「なによ、関係ないでしょ！さいてい！！！」

先生 「まあ、君たちの質問には追々答えていくから、まずは先生からのおしらせを聞きなさい」

女生徒 「はい」

先生 「その青井！！…おまえは特にだ！解ったか？」

青井 「えっ！？」

先生 「入試の時の様に途中から寝てたら、今度こそ怒るぞ…」

「先生は監督官としてあの後、怒られたんだからな」

黒岩 「へえ。それでよく合格できたな？」

先生 「他の者もよく聞くように」

「これから一年間、共に勉強をしていくのだから、楽しい一年を過ごしたいだろう」

「約束は約束、規則は規則だ。もう高校生になったのだから自覚を持って行動するように」

先生 「今日はホームルームの後、全員で講堂に集合して入学式だ」

「学級委員の選挙は、もう少しお互いを知ってから実施する」
緑川 「はい！俺、委員長します！」

先生 「その気持ちは立派だが、ちゃんと選挙というものをしない
とな」

緑川 「……………」

先生 「まずは自己紹介だ。ちゃんと名簿順に座ってるな？」

「窓際の列、前の席…青井からだ」

山本 「青井さんは、もう知っています」

生徒 「はははははははははは」

青井 「青井夕菜と申します。池野第一中学からきました。」

好きなものはプリン。得意は授業中に静かに寝ることです。

「
みんなから男の子みたいと言われますが、やはりテレビ大
好き夢見る少女です

よろしくおねがいします。終わり」

生澤 「北浦中からきました、生澤 れいみと申します。

料理を作るのが好きなのですが、分量とかきちんと計らな

いので、

お菓子とかを作るのは苦手です。

早く仲のいい友達を作ってクラスに融け込みたいです。

これから、よろしく願います。」

黒岩 「黒岩健吾。山本のお目付け役です。あいつが変な事したら
俺に報告してください

趣味は推理小説を読む事。いつかは名探偵になりたいです」

琴葉 「琴葉志保です…趣味は読書。夕菜と同じ池野第一中学から
きました

よろしくおねがいします」

柊 「はじめまして、柊夕陽です。

…あ、まだ何か言うんですか？えーっと、

花が好きなので園芸部に入ろうと思ってます」

緑川 「ども緑川輝です。とにかく楽しい事が大好きなんで、毎日盛り上がっていきましょー！

あ、あと学級委員長に立候補予定なんで、みんなよろしく

ね」

山本 「俺、山本康介。趣味は格闘系全般。もちろんゲームでは無い！

もし誰かいじめられたら俺のところに来な。俺がそいつを

……」

生徒 「おおおおおーぜひおねがいしまーす」

先生 「みんな自己紹介終わったな。次は、このプリントに各自で目を通す様に

「学級委員の選挙まで暫定として…委員をやりたいと言っていた緑川！お前に委員長代理を頼もうかな？」

緑川 「はい！みなさん、今回委員長をまかされた緑川でっす」

生徒 「まだ暫定だろ！ざんてい」

先生 「では暫定委員長、このプリントをみんなに配ってくれ」

と言うと、校則の抜粋や入学式の式次第などの書かれたプリントの束を緑川に渡した

緑川 「ねえ、ちよつとちよつと」

柊 「はい、私ですか？」

緑川 「そうキミ、柊さん…だったよね。暫定副委員長やってよ」

柊 「え！？私がですか！？」

緑川 「はい、決まりね。じゃああと宜しく！」

柊 「あ、あの、ちよつと！…行っちゃった…あとよろしくって、プリント配り！？10枚も！…委員長さん……」

先生 「みんなにプリントは行き渡ったか？」

そこに書いてあるのは、この学校生活の約束事だ。

生徒手帳にも書いてあるが、各自ちゃんと覚えておくように。

特に、共有で使うもの等は各自が責任を持って大事に扱ってほしい。

もちろんゴミもちゃんと分類して、何時もさわやかな学校生活をおくれるよう、心掛けてほしい

アナウンス 『新入生のみなさん。入学式の準備ができました。各クラスの先生の指示に従って、講堂にお集まりください』

先生 「さあ行くぞ。名簿順に廊下に並んでくれ」

「青井、大丈夫か…新入生挨拶は？」

青井 「任せといてください、ばっちりです！」

先生 「そうか、頼んだぞ！」

入学式

学長 「みなさん ご入学おめでとうございます

さくらの高校は、君たちを歓迎します。

これからの三年間、我が校で沢山の思い出を作ってください

三年間、楽しい事・嬉しい事・辛い事と、沢山あるかと思

いますが、

三年後に同じこの場所で、私に良い思い出ができましたと、

報告してください」

新入生代表挨拶

司会 「新入生挨拶。新入生代表 一年H組 青井夕菜」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

司会 「一年H組 青井夕菜」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

琴葉 「夕菜、夕菜！出番だよ、夕菜！起きてよ！！」 (>ω<・)

青井 「うつ・・・・」 目をゴシゴシ！！ 「おはよう」

琴葉 「なに寝ているの！代表挨拶だよ」

青井 「ハイ！！」

青井は勢いよく立ち上がり、壇上に向かった。しかし挨拶文の書かれた原稿を椅子に置いたまま…。

「あれ？原稿がない……Σ（　　）どうしよう？？」

司会 「どうしたんですか、青井さん？」（小さな声で……）

青井 「原稿を置いてきてしまいました」（小さな声で……）

司会 Σ（　　）「何でもいいのでとにかく、挨拶をお願いします」

青井は意を決したように、思いつくままにマイクに向かった

青井 「みんな〜だ〜いすき！以上！！」

「新入生代表 一年H組 青井夕菜」

全体 「……………」

そのまま青井は自分の席に歩いて戻った

全体 「ハハハは……………はははは」 パ

チパチパチパチ！！！！

琴葉 Σ（　　）「夕菜……………」

学級委員選挙

先生 「前もって言っていた通り、今日は学級委員を決めたいと思う。」

今日選出するのは、学級委員長・副委員長と、飼育・保健・美化・風紀の各委員で合計六つだ

緑川！暫定委員長最後の仕事として、前に出て司会してくれ」

緑川 「はい、先生！」

「それではこれから、各委員の選出を行います」

「まずは委員長ですが…誰か、俺以外に立候補する奴はいるか？」

生徒 「いいんじゃない〜。結構めんどくさそうだし…みんな緑川の事、委員長って呼んでるし……」

緑川 「では、反対の方は手を挙げてください」

黒岩 「……それって賛成の方、じゃないのかな」

緑川 「じゃ、賛成の方は手を挙げてください」

生徒 「は……い。いいです」

緑川 「先生いいですか？」

先生 「多数決で決まったなら、先生に異存はないぞ」

緑川 「では、今日から正式に学級委員長になりました。よろしく

」

「次は副委員長だけど、俺はこのまま柊さんにやってもらいたいと思います」

柊 「ええっ!？」（口；）

緑川 「他に推薦や立候補者いませんか？」

「いなければ、柊さんを副委員長に賛成の方……」

山本 「待てよ!柊さんの意見ぐらい聞けよ」かわいそうだぞ」

「じゃあ……柊さん、やってくれますか？」

柊 「……えつと……」（口；）

緑川 「お願いします」

柊 「あ……はい……」（すごい小さい声で）

緑川 「では賛成の方、手を挙げてください」

山本 「は……い」

緑川 「では決定で……柊さん、板書をお願いします」

「次に、各委員を決めたいと思います」

「どなたか、委員に立候補する方いませんか」

青井 「はい!私、保健委員したいです」

生徒 「おい夕菜、授業サボれると思って立候補したんだろう」バ

レバレだぞ」

琴葉 「私、飼育委員に立候補します」

生徒 「私は美化委員」

生徒 「私は図書委員」

山本 「オレ風紀委員」

黒岩 「おい…風紀委員なんて、お前が一番風紀を乱してるんじゃないか…」

山本 「うるせい」

緑川 「他に立候補する方はいませんか？」

「…ないようですね」

「では、立候補された方に委員をやってもら事で賛成の方、手を挙げてください」

黒岩 「はい、賛成」

緑川 「じゃあこれで全て決まりました。先生、いいですか？」

先生 「よし、じゃあこれから一年間よろしく頼むぞ」

第1章 卯月（うづき）の章（後書き）

第一章お読みいただきありがとうございました
よろしければ評価欄に足跡を残していただければ幸いです

第2章 皐月／早月さつきの章に続く・・・

第2章 皐月／早月（さつき）の章

生澤日記

ネットブログ

- - - いなはの日記

- - - 5月×日

- - - 入学したときから気になっている同級生のひとがいます。
- - - 仮にアイさんと呼びますね。
- - - アイさんは運動神経が良く、とっても格好いいんですよ。
- - - つまらない授業だと、すぐに寝ちゃうアイさん。
- - - そんな時はじっと見つめてられるので私にとってはパラダイスな時間です。

- - - でも、未だにアイさんと友達になれないんです（ＴＴ）
- - - 教室でどうも話しかけづらくってね………何か良い方法無いかな？

いなはさんへ……メール送信 From 涙

- - - 5月×日

- - - はじめまして いなはさん いつも楽しく日記を読ましていただいてます

- - - 日記をホームページで書くななんて勇気あるな

- - - ハンドルネームは 涙とうします

- - - 一度は 感想をと思い メールしました

- - - いなはさんは 今年学校に入学なんですか？

- - - 実は オレも今年 高校に入学しました

- - - やはり、はじめて高校行くとドキドキしますよね

- - - オレも、どんな人がクラスにいるか ドキドキしました

- - - オレからのアドバイス やはり 気になる子がいたら勇気をもって話しかけたほうがいいよ

- - - オレなら絶対 そうする

- - - オレは 中学からの友達も何人かいるから・・・自分で渡せない時は友達に頼むし

- - - 机の中とかに せめて自分が見ているよって メッセージ入れるのも手かも

- - - これから 楽しくやるには 最初が肝心だし がんばってください

- - - また お便りします

涙さんへ・・・メール送信 From いなは

- - - 涙さん、メールありがとうございます。

- - - 涙さんのアドバイス通りに、

- - - 手紙で呼び出してみようと思います。

- - - 結果は日記に必ず書きますね。

- - - いなはがホームページに日記を書く切っ掛けになったのは

- - - 受験の時に息抜きでなんですよ。

- - - そうそう、言い忘れましたが、いなはも高校1年生です。

- - - まだ慣れない学校生活で、友達もいないの(TT

- - - だから、相談する人もいなかったの

- - - 涙さんのメールが本当に嬉しかったんです。

- - - よろしければ、今後もメールのやりとりをしませんか？

女の子からのラブレター

夕菜はいつも、始業ぎりぎりの登校。

決して寝坊しているのではなく、単に行動が鈍いだけ。

下駄箱で登校時に人に会った事なんて、ほとんど無い。

いつものように自分の下駄箱を開けると、一通の手紙が足元に落ちた。

青井 「なんだろう、これ？」

夕菜は足元に落ちた手紙を手にとって見る

青井 「果し合い状だ……って、そんなことはないか？それとも私宛にラブレターだったりして！これこそ学園生活の醍醐味、ここから愛が芽生える」

青井 「あれ？宛名も書いてないし、差出人も書いてないぞ……」

夕菜はその、何も書いてない封筒をその場で開けてみた

手紙『今日、2時に東階段を出た所の屋上で待っています。ぜひ、来て下さい』

青井 「なんだろう……こんだけしか書いてないし」

「おおっと～授業が始まってしまう」

夕菜は手紙をポケットに突っ込むと、あわてて教室に向かった

夕菜は2時少し前に手紙に書いてあった場所に向かった

青井 「あれ？誰もいないぞ？……今日は午後の授業が一時間しか無いので 1・帰りに熱々コロッケを買い食いして 2・本屋で立ち読みして 3・買わない洋服屋を覗く 暇な時専門行動をしようと思ったのに……ぶつぶつぶつ」

女の子「青井さん……」

青井 「うつ……」

夕菜が階段へ続く入り口を見ると、一人の女の子が立っていた

青井 「あれ？あなた、確か同じクラスの……？」

女の子はショートカットの髪に赤いヘアリボンをつけ、目がパツチリしてなかなかおとなしそうに見える

青井 「あれ？……もしかして、この手紙を私の下駄箱に入れたのは、

生澤さん……？」

生澤 「はい……ご迷惑かと思いましたが、なかなか教室では言いにくくて」

青井 「……？」

生澤 「よろしければ、お友達になってください……だめですか？」

青井 「もちろんOKさ！……君みたいな可愛い子と友達になれなく

て何が青春だ…」

「あつ！！こんな言葉使い変だよね？男の子みたいで」

生澤 「そんな事ないですよ。私、結構好きです」

青井 「友達になる申し込みだったら、教室で直接いえばいいのに

…」

生澤 「いや、なんか直接って恥ずかしくないですか？」

青井 「そんな事ないよ」

生澤 「私、どちらかと言うとメールとかの方が好きなんです」

青井 「メールって言うと、携帯とかパソコンで、やるやつ？」

生澤 「そうです…青井さんもやられるのですか？」

青井 「夕菜でいいよ…私めれいみと、これから呼ぶし」

生澤 「ありがとうございます！嬉しいです」

青井 「メールはやらないな。携帯で書くと指がつるし…パソコンで書こうとすると、どこにどの文字あるか解らないしね…結局電話

で済ます」

生澤 「今度、やり方教えますよ」

青井 「私にできるかな？」

生澤 「簡単ですよ。それに、とても便利」

青井 「じゃ、機会あったらお願いするよ」

生澤 「喜んで」

「ところで、来週の土曜日は何か予定ありますか？」

青井 「今のところ決まってないな。DVD借りて家で見るとかは直前で決めるし」

生澤 「よろしければ、私の家に遊びに来ませんか？」

青井 「君の家？」

生澤 「はい。その日は両親が親戚の家に行くので…一人ぼっちなんです。一人でご飯は、寂しくて。よろしければ、パソコンの事もありますし一緒にご飯食べませんか？」

青井 「迷惑掛からないかな？」

生澤 「迷惑なんてとんでもないです…夕菜さんに来ていただける

なら、腕によりをかけてご飯用意します…買い物だけ付き合っただけでしたら」

青井 「買い物なら任せといて！値切りの夕菜に！」

生澤 「頼りにしてます。では、来週の土曜日に校門前で待ってます」

青井 「うんうん。楽しみに待っているよ。またね」

生澤 「では、失礼します」

青井 「結構、真面目でいい子みたいだ…」

そう呟くと、夕菜も下校した

第2章 皐月／早月（さつき）の章（後書き）

第二章お読みいただきありがとうございました

よろしければ評価欄に足跡を残していただければ幸いです

第3章 水無月みなつきの章につづく

第3章 水無月（みなづき）の章

3 - 1 生澤日記

- - - いなはの日記 ネットブログ

- - - 6月×日

- - - 今日、メル友になった 涙さんのアドバイスのおかげで

- - - アイさんと友達へ進展!!

- - - もう、感激です。

- - - でねでね、なんと来週、遊びに来てくれるんですよ。

- - - いなは料理は得意だから、いっぱいおいしいもの作っちゃうぞ。

- - - もう嬉しすぎて今日は寝られそうにないよ

- - - 本当に涙君には感謝します。

3 - 2 いなはさんへ・・・メール送信 From 涙

- - - 6月×日

- - - いなはさん おめでとうございます

- - - 少しは オレのアドバイスが効果あったみたいです

- - - しかも いなはさんの日記に オレの名前がでて 二度びっくりです

- - - いなはさんが 気に入った人だと結構 かつこいい人かな

- - - オレにも かわいい女の子いたら紹介してください

- - - あっ これは メールで 知り合ったばかりの人に言うことじゃないね

- - - 男の気持ちぐらいだったら いつでも 相談にのりますので

- - - 彼氏とがんばって ください

- - - また お便りします

3 - 3 涙さんへ・・・メール送信 From いなは

- - - 日記に書いた通り、涙さんのおかげです。
- - - 本当に感謝 感謝。
- - - そうそう、勝手に日記に名前を出しちゃってごめんなさい。
- - - 問題有ったら消しますから、言ってください。

3 - 4 ふたりの待ち合わせ

校門で待っているれいみ

青井 「れいみ！おまたせ」

生澤 「夕菜さん、遅いですよ」

青井 「ごめんね。いつものごとく、先生にお呼ばれしました」

生澤 「それはそれは。ご苦労様です」

青井 「さあ！こいこい・・・」

生澤 「はい」

二人は歩きながら買い物の相談をしていた

青井 「ところで、何を買うの？」

生澤 「夕菜さんは何が食べたいですか？」

青井 「なんでもいいよ。れいみがお得意としているものなら」

生澤 「それじゃ唐揚げと」

青井 「唐揚げいいね！まわりはサクサクで、中から肉のうまみ

が...

生澤 「夕菜さん...よだれが.....」

青井 「おっと...!!」Σ(□一一一)

生澤 「あとは...サラダとスープかな」

青井 「結構、作るの大変そうだね」

生澤 「それでもないですよ！夕菜さんも手伝ってくれれば」

青井 「いつもは食べるの担当だけど、今回は手伝いましょう」

生澤 「期待してます」

青井 「じゃあ、買い物は肉屋さんと八百屋さんだね」

生澤 「八百屋さんなら、商店街の路地を曲がったところが安いですよ」

青井 「おお、結構、料理作るんだ？」

生澤 「はい…私のところ、両親が共働きで私ができることが多いのですよ」

青井 「それは大変だね」

生澤 「もう慣れましたよ。でも、今でも一人で食べるのは寂しいですが…」

青井 「そうなんだ…うちは戦争だよ、おかずの取り合いで夕飯時は臨戦態勢」

生澤 「うらやましいですね」

「今日は夕菜さんが一緒なので、嬉しいです」

青井 「それはよかった」

生澤 「ゆっくりしてってくださいね」

青井 「もちろん…めいっぱい食べるよ！」

生澤 「それじゃたくさん作らないと…はははは！」

青井 「よろしくね」

3 - 5 ふたりの買い物

生澤 「おじさん、赤鳥も肉のおいしいトコ500グラムください」

青井 「おっ！このチャーシューもおいしそうだな」

生澤 「夕菜さん食べたいのですか？…おじさん、チャーシューも300グラムおねがいします」

青井 「悪いね。あつ、違う違う、お兄さん！その、脂のつた所ね いや、その横の…そう、それぞれ！」

店主 「あいよ、お嬢さん！お兄さんなんて嬉しいこと言ってくれ

るね！生澤家のお嬢さんも、毎日えらいね」

店主 「今日はお友達と一緒にかい？」

生澤 「はい」今日は一緒にご飯食べるんです」

店主 「そうか。じゃ、今日はおじさんは気分がいいので、チャーシューの方を少しおまけしとくよ！」

青井 「肉の方もおまけしてくれると、お嬢さんは非常に嬉しいのですが」 (^^)」

店主 「解った！お嬢さんも明日からうちの常連になってくれるなら、おまけしちゃう！」

生澤 「ありがとうございます」 (@ @ @)

青井 「ありがとう！愛してるよ！」 (〃^。^〃)

生澤 「次は八百屋さんですね」

青井 「荷物持つよ」

生澤 「いいですよ、大丈夫です」

青井 「いやいや、今日はとことんお手伝いしないと申し訳ない」

生澤 「そうですか」では、お言葉に甘えて…」

青井 「えっ??」 (^^;)

れいみは荷物を渡すのではなく、夕菜の手を握った

生澤 「迷惑ですか…?」

青井 「平気」」

八百屋で買い物も済ませた二人は、れいみの家に向かった

生澤 「これですべて揃ったし…」

青井 「れいみ、雨が降ってきたよ」Σ(。一一)はあ
うっ！

生澤 「早く帰りましょう、夕菜さん」

青井 「強く降るのかな？」

生澤 「平気だと思いますよ…天気予報は当てにならないけど」

二人は小走りでれいみの家に急いだ

料理をテーブルに並べて、二人は椅子に座った

青井 「なんか私、感心しちゃった」

生澤 「何がですか？」

青井 「れいみの料理の、手際のよさに」

生澤 「そんなこと無いですよ。夕菜さんもちゃんと、できたではないですか」

青井 「私のやったことなんて、お皿並べて、味見して、味見して、味見しただけ……」（＝＼〇＼＝）

生澤 「それが大事なんですよ、料理は。……さあ、食べましょ」

青井 「いただきま〜す！」

「超〜うま〜です……この、サクサク感の中にジューシーな甘みが……」

生澤 「ありがとうございます」

青井 「この秘訣を伝授いただけますか」

生澤 「もちろん愛情です！夕菜さんに対しての愛情がいっぱい入ってます」 ¥（＼・・・＼）ノ

青井 「あ〜これはお姉さん、一本取られました！」（＝＼＼・・・＝）
「あつ！アレね、れいみが言っていたパソコンって」

生澤 「はい〜私の宝物です」

青井 「へえ〜好きなんだ？私も買ってもらったけど、ほとんどいじってな」

生澤 「インターネットはできるのですか？」

青井 「インターネットって？？」

生澤 「メールとかやる時に接続するやつです」

青井 「あまり使い方を知らない……それってなんか必要なの？」

生澤 「えっと、パソコンがあればあとはプロバイダーに接続するだけで簡単ですよ」

「夕菜さんはどちらかのプロバイダーに加入しているのですか？」

青井 「えっと…たしか生協は入っていると思う。買い物するときカードが必要だから」

生澤 （；、ー、） 「夕菜さん…生協は生活協同組合ですが、プロバイダーじゃないですよ」

青井 「そうなんだ？」 （ハハ；） <

生澤 「後で簡単に教えてあげますね」

「冷めないうちに食べちゃいましょう！」

青井 「うんうん」

3 - 6 恋の始まり 2

外の雨はますますひどく降ってくる

青井 「そろそろ雨がすごいから今のうちに帰るよ」

生澤 「エエ、帰っちゃうの、夕菜さん」

青井 「うんうん。だって雷も鳴っているし、帰れなくなっちゃうよ」

生澤 「私はそれでもいいもん。夕菜さんが一緒なら、雷も怖くないし」

青井 「それはまずいよ。私、家にお泊りするって言ってないし…お泊まりセットも持ってきてないもん」

生澤 「ジャージでよければ、新しいのは私の貸してあげるから」

青井 「今日はやっぱり帰るよ…。ありがとう、ご飯おいしかったよ」

夕菜が立ちかけた時、雷鳴と共に部屋の電気が消えた

青井 「あっ！停電みたい」

夕菜は停電には驚かなかったが、いきなりれいみが胸に飛び込んできたのには、驚いてしりもちをついてしまった

生澤 「夕菜、こわいよ、エエ、ンエエ」

青井 「大丈夫だよ、れいみ。すぐ、電気つくから」

どれくらい時間が経っただろう？停電の直る気配はない。れいみは

夕菜の胸の中で、借りてきた子猫みたいにうずくまっているし、それより相手が女の子とは言え、抱きつかれたと言つかこんなに密着したのは、中学の卒業式の日にみんなで泣いたときぐらいしかない。でも、今回はあの時とは状況がまったく違う。しばらくすると、停電前ほどではないが周りの様子が少しわかるものだ。しかたないな、そう思うと夕菜はポケットから携帯を取り出して、自宅に電話をかけた。

青井 「あつ、若葉、お母さんに代わって」

幸いにも自宅は停電になっではないようだ。しばらくして夕菜の母が電話に出た

夕菜の母 「あら夕菜。どうしたの？」

青井 「うん、いま友達の生澤ちゃんの家にいるのだけど、なんか停電でしかも生澤ちゃんの御両親が旅行でいないんだ。もしかするとこのままお泊りするけど。よろしく!!」

夕菜の母 「よろしくって。あなた、そちら様にご迷惑にならないの？」

青井 「たぶん……」

夕菜の母 「たぶんって。あなたねえ」

青井 「じゃ、電池もつたいないので切るね。おやすみ」

夕菜の母 「ちょ……ちょ……カチャ……ツーツー」

青井 「よし、報告終了。ってわけでお許しもらったからお泊りするね、れいみ」

3 - 7 恋の始まり 3

青井 「れいみ、聞いている？」

生澤 「うん……聞いている」

れいみは小さい声で答えた

生澤 「夕菜がいてよかった……一人だったら怖くって怖くって……夕菜は怖くないの？」

青井 「雷はたしかに怖いけど、停電はなんともないな」

生澤 「夕菜は強いね」

青井 「そんなことはないよ？普通だと思っけど」

青井 「でも…なかなか停電直らないね」

生澤 「うんうん」

青井 「れいみの家にはロウソク無い？」

生澤 「台所にあると思うけど、行きたくない」

青井 「じゃ、私が見てくる」

生澤 「だめ…いっちゃ」

青井 「れいみ、すぐ戻ってくるからさ。ちょっとだけ待ってて…」
ようやくれいみは、夕菜に抱きついていてる手を離れた

生澤 「すぐ、戻ってきてね？すぐだよ、すぐ」

青井 「速攻で戻ってくるよ…」

夕菜はようやく立ち上がり、部屋を出て階段をおりようとしたとき

生澤 「夕菜…まだ？」

青井 「………」

生澤 「夕菜あ…どこ？」

青井 「ここにいるよ」

生澤 「まだなの？」

夕菜は台所にあったロウソクとライターを見つけて、部屋に急いで戻っていった

生澤 「夕菜…おそ…い！れいも、5分も待ったんだから」

青井 「よしよし。いいいいい」

心では、何だこの子とは思いながらも、れいみの頭を撫でてなだめ、ロウソクに火をつけた

青井 「れいみ、もう平気だよ。ロウソクに火をつけたので、もう暗くないよ」

生澤 「ほんとう…？」

青井 「本当だよ、見てごらん。すごくロマンチックだよ」
れいみはおそろおそろ顔を上げて目を開けた

生澤 「本当だ、暗くない。ありがとう夕菜」

青井 「ロウソクの火って不思議な魅力あるよね」

生澤 「うんうん」

青井 「よくさ…」

生澤 「うん」

青井 「お風呂で電気消して、ロウソクの火だけにして入るんだ…
結構ロマンチックだよ」

生澤 「そうなの？」

青井 「うんうん。お母さんに内緒でよくするんだ。そうすると、
いろいろな事が考えられるんだ」

生澤 「そうなんだ…でも一人だと、もしロウソク消えたら怖いし
…夕菜、一緒に入ってくれる？」

青井 「私と一緒に??」

生澤 「うんうん。だって一人じゃ本当に怖いし、夕菜が言いだし
つべだし、もし夕菜と一緒にでないと、れいみ多分ずっとロウソクだ
けでお風呂なんか体験する機会無いよ」

すごい自己論理だと夕菜は思った

生澤 「だめ？」

夕菜は考えたけど、まあ女の子同士だしそれほど問題ないと思い、
承諾をした

生澤 「じゃロウソク持ってお風呂場まで一緒にいこ。ジャージと
新しい下着を用意するからちよつと待ってて…」

生澤 「ちゃんと近くにいてね?先に行っちゃ泣いちゃうよ」

夕菜はれいみと一緒に風呂場に向かった

3 - 8 恋の始まり 4

夕菜とれいみは着替えを用意し、一緒に風呂場に向かった

青井 「れいみの家はけっこう広いね……」

生澤 「うん…一人でいるのけっこう怖いよ」

青井 「この分だと、お風呂場も広そうだね」

生澤 「広いと思う…」

二人は着ているものを脱衣場で脱いで、風呂場のドアを開けた

青井 「うは…広い！私の家の倍以上はある」

生澤 「へへへへへ」

青井 「これなら一人で入るのは怖すぎ。私でも無理かと……」

生澤 「でしょ…」

青井 「浴槽も、二人で入ってもまだ余っている」

生澤 「いつでもお泊りにきていいよ」

青井 「……………」

なんで、停電で無いときも一緒なんだ？まあ、詮索はしませんが…

青井 「ロウソクの火、いいでしょ？」

生澤 「うんうん！すごいロマンチック」

青井 「こんなのを恋人と二人で入ったら最高だろうね」

生澤 「よくわかんないけど…いいものだろうね」

青井 「その前に、一緒に入ってくれる恋人つくらないと」

生澤 「じゃ、それまでれいみが夕菜の恋人だ」

青井 「……………」Σ（「ロ——」）Σ

（、〇、）

生澤 「夕菜、私が背中を洗ってあげる」

青井 「いいいいいよ。自分で洗えるから……」

生澤 「遠慮しないの」

いつの間にかすっかり、れいみのペースに夕菜ははまっていった。

ゴシゴシ ゴシゴシ もひとつおまけに ゴシゴシ……

青井 「ううううう！いたきもちいい」

生澤 「でしょ」

生澤 「今もたまにお母さんに洗ってもらうんだ、私……」

生澤 「夕菜のおっぱい、私よりちいさい」

青井 「どこ見てるの！まったく…現在発育前なのです。れいみも同じくらいだよ…見た目は……」

生澤 「夕菜も見ているじゃない〜比べっこしてみようか？」

れいみは夕菜の胸に手のひらを当てた

青井 「ちょ ちょ ちょつとれいみ…なに触ってるの」

生澤 「いいじゃん、減るものでないし。…夕菜も私のおっぱい触ってみて？」

と言いながら、れいみは夕菜の手を自分の胸にもっていった

青井 「れいみ〜ちょつと！本当に待ってよ…」Σ（。〇。―）

生澤 「ごめんね夕菜…あまりにもちっちゃくて、かわいかったの
で…怒った？」

青井 「怒ったと言うより、いきなりなので驚いただけ」

生澤 「よかった…」

生澤 「じゃ、次は夕菜が私の背中を洗ってね」

青井 「ラジャ・隊長！」

風呂から出てジャージ姿に着替えた二人がれいみの部屋へ向かう階段を上がりかけたとき、パツと明りがつき停電が直った

青井 「停電なおった〜」（@ 〇 @）

生澤 「よかった〜」（ー）

れいみは停電のときが嘘のように明るく階段をかけのぼっていった

3 - 9 恋の始まり 5

部屋に戻り、ベッドの片隅に腰を下ろして……

生澤 「ちよつと台所に行って、あったかいココアと何か食べるもの
のってくる〜」

青井 「いつてらっしやい〜」

しばらくすると、マグカップに入ったココアと手に持ちきれないほどのお菓子をもってきた

青井 「そんなに持ってきたの！？太るよ〜」

生澤 「いいのいいの♪夕菜と一緒にだと、なんか嬉しくって…」

青井 「……………」

それからしばらく二人で色々な話を話し合った。学校生活のこと、部活のこと、友達のこと、恋のこと…そんな中でれいみは、こんな質問をしてきた

生澤 「ところでさ…。夕菜、男の人にギューと抱きしめられるのと、男の人をギューと抱きしめるの、どっちが好き？」

青井 「私は断然、後ろからギューされるのが好き」

生澤 「私は逆だな。たぶん、ギューとするほうが好き」

生澤 「じゃ、私が…」

いきなりれいみは夕菜の後ろに回って抱きしめた。さすがにお風呂の行動でわかったせい、夕菜は驚かなかった

生澤 「夕菜は彼氏がいるの？」

れいみは夕菜の耳元で質問をした

青井 「いないよ。そのための高校生活！あの学校には伝説の木があるし、なんかときめくような出会いしたい！」

生澤 「私もいないの…私にも素敵な彼氏が現れるかな」

青井 「ぜったい現れるから！心配しなくてもれいみは可愛いし」

生澤 「そうだ…夕菜にあげたいものがあるんだ」

そう言っていると、夕菜にまわしていた手を解いた

生澤 「夕菜、ちょっとだけ目をつむっていて」

青井 「うん」

と言うと夕菜は目をつむった

生澤 「まだあけちゃ、だめだよ」

夕菜の唇に暖かいものが触れた。夕菜が目さつと開けると、そこにはれいみの顔が…

生澤 「私のファーストキスを夕菜にあげる」

そう言っていると、また夕菜の後ろに戻った

青井 「れいみ……」（。ー。；）

生澤 「夕菜、驚いた？」

青井 「うん」

生澤 「ファーストキスはレモンの味と誰かが言ってたけど、れ

いみのファーストキスはココアの味♪」

青井 「もうだいぶ遅くなった…れいみ、そろそろ寝ようか？」

生澤 「うんうん。寝よ寝よ…」

時計を見ると、もう2時を過ぎていた。夕菜は布団に入り、今日の出来事を思い返していた。布団に入ってしばらくすると、隣で寝ていたれいみが布団の中でごそごそとしていた

青井 「れいみ、どうしたの？」

生澤 「うん…なんでもない。気にしないで」

青井 「気にしないでって言われても…」

生澤 「…ジャージ脱いでいるの……」

青井 「ぬ ぬ 脱いでいるって…！」Σ(□;)

生澤 「なんか私、ジャージはゴワゴワして、着てると寝れないんだ…隣は夕菜だから平気だもん…」

青井 「それは平気と思うが……」

生澤 「夕菜も脱いじやったら？…気持ちいいよ」

青井 「私もなの!？」

生澤 「うんうん…早くはやく!れいみが手伝ってあげる♪」

と言うとれいみは夕菜にまたがり、夕菜のジャージのジッパーに手をかけた

青井 「れいみ!ちょ ちょ ちよつと待ってよ!」(>ω<;)

生澤 「そんなぐせつかくの二人きりなのに…それとも私のこと変な子だと思っているの?」(□)

青井 「わかったわかった…自分でするから」(x|x;)

青井 「だからちよつと、そこをどいて……」

生澤 「はい♪」(*、)ノ

れいみは夕菜が諦めたのを知って、夕菜の上から降りた

生澤 「夕菜の体って温かいね」

青井 「……………」

生澤 「ねえ、夕菜…」

青井 「なあに?」

生澤 「私のこと、本当に変な女の子だと思ってない？」
青井 「そんなこと、本当に無いよ」
生澤 「本当に、ホント？」
青井 「本当にホント………ついでに、ホント」
生澤 「よかった」。私ね…夕菜に逢えてよかった」
青井 「私も……」
生澤 「ずっとずっとずっと、れいみのお友達でいてね」
青井 「うん、解った………ずっとずっととお友達でいる」
れいみはぴったりと夕菜にくっついた
そして二人は手をつないで、二人きりの初めての夜を過ごした……

3 - 10 生澤日記

- - - いなはの日記 ネットブログ

- - - 6月××日

- - - 今日は雷雨のために停電。

- - - カミナリ怖いよ〜暗いところで一人ぼっちは怖いよ〜のいなはですが、

- - - 今日はカミナリにちよっぴり感謝。

- - - それというのも、アイと一緒にいるときにカミナリが………そして停電。

- - - 怖くってアイを思わず抱きしめちゃった。

- - - アイの心臓の音がドクン…ドクン…

- - - それを聞いているととっても落ち着いて心地いいんですよ〜

- - - なんか、幸せを感じちゃいました。

- - - その後も、沢山良い事があって夢見心地。

- - - ロウソクの火ってふしぎな魅力がありますよね。

- - - ロウソクの火に照らされるアイの顔を見ていると、停電がずっと続いて

- - - 欲しいと思ってしまったいなはでした（^^

第3章 水無月（みなづき）の章（後書き）

第三章お読みいただきありがとうございました

よろしければ評価欄に足跡を残していただければ幸いです

第4章 文月（ふみつき／ふづき）の章につづく

第4章 文月（ふみつき／ふづき）の章

4-1 マラソン大会

体育祭の目玉はやはりマラソン。全生徒からの選抜でマラソンは行われる

青井 「よかったよ、選手に選ばれなくて……」

山本 「夕菜が選ばれるわけじゃないじゃん。遅くて、すぐ転ぶし」

青井 「そんなことないもん。これでもかけっこは早いんだぞ！」

山本 「それは、足は足でも逃げ足だけだろ……」

青井 「うつつうつつ。そんな事ないもん……絶対に」

青井 「ねえねえ、あそこのトップで走っている人って誰？」

生徒女「夕菜、知らないの？ほら、三年の御堂さんだよ」

青井 「御堂さんって……」

友達 「夕菜もテレビぐらい見るでしょ？いま人気のドラマに出演している、アイドルの御堂光！」

青井 「ああ、私も見てる。道理でドコかで見たような顔だったんだな……で、なんでそのアイドルがマラソン大会に？撮影かなにか？……で、カメラはどこ？」

友達 「マラソン大会にアイドルでなくて、アイドルがマラソン……マラソンがアイ……もうわかんなくなっちゃった」

生徒女「だーかーらー、御堂先輩はこの学園の生徒で、仕事が芸能人だということ！」

生徒女「で……生徒がマラソン大会に出ることは普通のこと……わかった」

青井 「そうなんだ……うちの学校にアイドルがね……ふむふむ」

生徒女「あんだ、もし友達になろうとしても無理だと思うよ？念のために言っとくけど、取り巻きファンが結構いるんだから、この学校の中にも……あんだの入り込む隙間ないよ」

青井 「ふ〜ン…あんまり興味ないな」

青井 「じゃ、私はテラスに行ってくるね。…うちのクラスがトッ
プを走っていたら、もっと見る気にはなるが…これじゃね」

山本 「先生に見つかるなよ」

青井 「ご忠告ありがとう。気をつけるよ」

山本 「それを言って、何度先生に見つかったんだよ」

青井 「気にしない気にしない」

4 - 2 渡り廊下

青井 「あれ、柊さん。どうしたの、こんなところで？」

柊 「青井さんこそ。どこか行くの？」

青井 「うん、ちよつとテラスまで…」

「それより…なんだか顔色悪いよ？大丈夫？」

柊 「大丈夫だと思う」

青井 「大丈夫と思うって言ったって、見た目大丈夫じゃないよ？」

柊 「まあ、いつものことだから気にしないで？」

青井 「そんなこと言われても、保健委員として見過ごしはできま
せん！」

青井 「保健室いこ？」

柊 「少し休憩すれば大丈夫だから…」

青井 「遠慮しないで…」

夕陽は夕菜に連れられて保健室に向かった

4 - 3 親友

青井 「先生、おじやましま〜す」

「アレ？先生いない？」

「まあいいか…とりあえず柊さん、ベッドに寝てて」

柊 「うん…」

夕陽はベッドに腰掛けた

青井 「寝なくて平気なの？」

柊 「うん、大丈夫よ」

青井 「柊さんって、体弱いのか？」

柊 「弱いつて言うか…私ね、少し喘息で」

青井 「それに…今日はちょうど生理も重なっちゃったし」

柊 「それは辛いね。あ、だから体育も休みがちなんだ？」

青井 「うん、そうなの」

柊 「それなのに副委員長の仕事までやって、大丈夫なの？」

青井 「まあ、一度引き受けたからにはちゃんとやらないとね」

柊 「そんなの気にせずに断っちゃえばいいのに…。柊さんは普通の副委員長の仕事だけでなく、委員長の仕事までしてるみたいだし」

青井 「せめて、みんなの手伝いできたらと思ってね」

柊 「私、委員長は苦手だな…いつもうるさいし」

青井 「でもね、委員長は悪気無いと思うよ？」

柊 「悪気あったら大変だよ…」

青井 「それにさ、柊さんもいつも忙しくしてて、何だか私なんかと話したくないのかな…って思っていた」

柊 「ぜんっぜん、そんなこと無いよ？青井さんっていつも明るくて、逆に私は近づけないと思ってたぐらいだよ」

青井 「よかった…私たち、同じこと考えてたんだね」

柊 「ふふ…そうだね」

青井 「なんか、柊さんって呼ぶのは私らしくないと思っていたんだ」

柊 「今日からは私らしく、夕陽って呼ぶことにするから。」

青井 「うちの事も夕菜って呼んでよ」

柊 「ゆう…な。何だか照れくさいね」

青井 「そこまで真剣にならなくてもいいよ」

柊 「なんだか、青井さんと友達になれて元気が出てきたみたい」

青井 「また、青井さんって言った」

柊 「あは、慣れるように努力シマス」

「私、まだやり残した仕事もあるし、夕菜ちゃんのおかげで元気が出てきたから行くね」

青井 「本当に平気なの？」

柊 「うん。心配してくれてありがとう」

青井 「それじゃ、行きますか。何かあったらいつでも相談してね」

柊 「もちろん夕菜ちゃんもよ？」

二人は明るい顔で保健室を後にした。

テラス

青井 「ここのパフェだけは絶品なんだよね。でも一日に限定数があるからなかなか食べられない。マラソン大会様様だな。ちよっ
うまつま」

男 「君、ちょっとこの席をあけてくれないか？」

青井 「は？」

男 「この席で打ち合わせしたいので、席をあけてくれないかと言ってるんだ」

青井 「席なら他にもあるでしょ。食堂の中にもたくさんあいているし、そっちに行ったら？」

男 「いや、中は人が大勢いるし、ここなら他の席から離れているので…」

青井 「見えないの？私は今、至福のときの真っ最中。お取り込み中。DO not disturb 理解できる？」

御堂 「どうしたんだ、マネージャー」

マネージャー 「こちらのお嬢さんが席を譲ってくれないのですよ」

青井 「なんか知らないけど、この男の人が席をとろうとするのですよ」

御堂 「ははははは、面白い子だ。マネージャー、ここでは僕は生徒なんだよ。そんなことしないでくれよ」

マネージャー 「失礼しました」

御堂 「悪かったね。えっと、君の名前は？」

青井 「一年の青井夕菜です…で、君のお名前は？」

御堂 「ははははは、本当に面白い子だ。僕は三年の御堂光」

青井 「知ってますよ、有名なもの。聞いてみただけ」

御堂 「マネージャー、あなたは車に戻って待っていてくれ。打ち合わせは移動中でもいいだろ」

マネージャー 「…わかりました。では車でお待ちしています」

御堂 「ごめんね、青井君。不愉快な思いさせちゃって」

青井 「気にしてないよ」

夕菜は御堂の話より （パフェに夢中）

青井 「ん？なに見てるのよ？」

御堂 「いや、あんまりおいしそうに食べているから」

青井 「うんうん、おいしいもん」（パフェに夢中）

御堂 「そうじゃなくて…僕がいるところで、そんなにパフェを夢中になって食べる子がいるなんて珍しいのさ」

青井 「そうかな？私は普通だと思うけど…えっ、もしかして、キヤー御堂さんだ！御堂さんがこっち見た…」って言ってほしいの？」（パフェに夢中）

御堂 「いやいや、そんなことは無いけど。青井くん見たい子が何だかすごく新鮮に思えてね」

青井 「私のこと、青井でなくて夕菜でいいよ。それに早く行かないと、あのうるさいマネージャーがまた来るよ…それが、あなたの取り巻きが…」（パフェに夢中）

御堂 「おっと、そうだった。じゃ、僕は行くから…そうそう、今度デートしようよ。連絡するよ」

青井 「うん…お仕事がんばってね…応援しているよ…」（パフェに夢中）

いなはさんへ・・・メール送信 From 涙

・・・7月×日

- - - 日記をみてて オレもなんか このままじゃけないなと 感じました

- - -すごい 進展じゃないですか・・・

- - -雷がきらいなんですか?? オレは平気だな

- - -これから 夏に入るから・・・いいチャンスですよ

- - -いつも いなはさんの日記の事しかかかないけど すこし

自分のこと書きます

- - -今年高校生になったばかりの男

- - -趣味は なんだろうな???

- - -結構 料理は得意なほうぐらいかな

- - -まあ まだまだ 修行中つてところかです

- - -すきな タイプの女の子は やさしい子 見た目はショートカットなんかいいな

- - -いなはさんの彼氏つて どんな感じなのですか? よければ 教えてくれるとうれしいです

- - -また お便りします

デートのお誘い

夕菜の携帯が鳴った

青井 「ほーい。夕菜はただいま電波の届かない場所に居るか、食べ物をお口にほうばっているの、電話に出ることができません」

男 「もしもし…夕菜君?」

青井 「おっと……誰?」

男 「僕だよ、御堂です」

青井 「御堂さん?なんで私の携帯番号を知ってるの?」

御堂 「いや、自宅に電話して夕菜君に用事があると言ったら、妹さんかな?教えてくれたんだよ」

青井 「でも私の自宅の電話はなぜ?」

御堂 「理事長がすぐ教えてくれたよ」

青井 「そうなんだ…あの理事長!」

御堂 「えっ!？」

青井 「なんでもないです、独り言!」

青井 「ところで、私に何の用事？」

御堂 「こないだ約束したでしょ、今度デートしようって」

青井 「しましたっけ？」

御堂 「まったく、夕菜君は面白いね。それで、どんなところがいいかと思っていたら、うちのスタッフがいくつかチョイスしてくれたんだ」

青井 「そうなんですか」

御堂 「それでね、夕菜君も知っているかもしれないけど、山下町にあるカフェテラーゼっていう店にしようかと思って。今度の土曜日、あいてる？」

青井 「知ってる〜知ってる〜! あのお店、超特大のパフェあるんですよ? 土曜はあいている! 誰がなんと言おうとあいてます!」

御堂 「よかった! じゃ、土曜にスタッフの車を回すので、それに乗ってきてよ。僕は間に合うと思うけど、近くでロケが入っているのでそれが終わったら 向かうから」

青井 「了解しました〜。で、時間は何時ごろ？」

御堂 「そうだな…ロケ終了が2時なので、3時には行ける。車は2時半には 向かわせるよ」

青井 「わかった。2時半ね」

御堂 「じゃあ僕は仕事があるから。また、土曜日にね」

青井 「またね〜」

青井 「うとうとう、やった! いつかはあそこのパフェに挑んでみたかった! 念願達成、御堂に感謝!」

驚きの電話

ある夜、夕菜の携帯が突然鳴った

青井 「うう〜ん…電話だ! だれ〜? 夕菜様はもうとっくに爆睡なのに…」

夕菜はベットの隅に置いてあった携帯をとり電話に出た

青井 「ふあゝい…夕菜です…：だれ？」

琴葉 「ゆうなゝ大変だよー！」（>ω<;）

青井 「志保？どうしたの？」目をゴシゴシ 寝ぼけモード

琴葉 「今ね、委員長から電話あって、夕方に学校で火事があったんだって！」

青井 「それはそれは…大変と言うより、ちょっと嬉しかったりして…」

青井 「で…学校が休校のお知らせとか？」

琴葉 「何言ってるのよ！夕菜、まだ寝ぼけてない…？」

琴葉 「学校は学校でも、桜の木が火事になっちゃったんだよー！」

青井 「え、桜の木が…！？」Σ（；；□；）

琴葉 「そうなんだよ！」

青井 「それで、原因はなに？」

琴葉 「それもまだ良くわかっていないと言っていたよ、委員長が…」

青井 「うゝん…桜の木も大事だけど、私は今は睡眠のほう的大事…」

青井 「志保も早く寝たほうがいいよ？明日も早いんだし」

琴葉 「それで私たちにも、明日は早く登校してほしいと委員長が言っていた」

琴葉 「伝えたよゝ夕菜」

青井 「ほほゝい…じゃ、おやすみ」

青井 「桜が火事か…：じゃ、目覚まし10分早くにしとくか」

青井 「この様子じゃ多分、委員長も電話かけてくるな。携帯の電源を切っておこう。OFFをぽちつとな！」

青井 「おやすみなさゝい」

名探偵登場

夕菜が桜の木の近くの橋の上に行くと もう何人かの夕菜の友達

ぐ 現場に駆けつけたんだ

先生たちが かけつけるのと 同時かな？

青井 そのときの状況 すこし 教えて

黒岩 先生たちは 危ないからここから離れろと 生徒をこの場所から退避させて 川からの水と 放水ようホースで 消化にあたっていたな

青井 それで ほかの人たちは？

黒岩 ほとんどが 橋手前から 状況を見てたって感じ

俺さ デジカメラで そのときの状況だけ 収めたんだ

青井 すごくいい……いつも 盗撮陽に持っているのですが？（こ

ーこ）

黒岩 もっているわけないだろ（。D）ゴルア！！

青井 で……その画像は 今も、もっているの？

黒岩 あるよ 俺なりに検証してみようと 昨日ちよっと 画像からのデータとってみた

生澤 データって 何んの？

黒岩 俺 まず 火事の現場の録画をみて 現場で 見ている人が

誰かと 確認して

青井 ねえ 実習室いこうよ でないと 聞いているだけだとわかんない

黒岩 そうだね そうしうか？

そついうと 6人はパソコンのある 実習室に向かった

名探偵登場2

青井 じゃ 刑事さん続きをどうぞ

黒岩 で 解ったのは そのとき現場にいたのは 30名 生徒26名と先生4名

火事が起こったときには そのうち 8名が現場に居たみたい

あとは 騒ぎ後駆けつけた あと集まってきたわけ 裏

つけもしてある

柊 全員に話をきいたの??Σ(。O。一一一)

黒岩 捜査の基本だよ基本

生澤 それで 発見者の証言は??

黒岩 それが 変なんなんだ? その8人は すぐ近くに居て 火事に気がつくまで 怪しいというか お互い8人いがい みた覚えがないといっているんだよ その 火をつけた犯人 仮に影の放火魔としよう 影の放火魔 が さくらの木にひをつけて 現場から立ち去るのは 無理なんだ ほら みんなも知っているように

黒岩は パソコンにだした 学校の地図を指差しながら説明した

このさくらの木は 小さな島の中央にあるわけだし いま打ち込むけど 火に気がつくまでは 現場にいた 人たちの場所は こと

こと・・・ここかな パソコンに 丸く印がついた 木の小島から出るには テラスに向かう ほら この橋をとらないといけないし この場所は 現場に居た全員が 目撃してします

生澤 じゃ 影の放火魔は 火をつけて この八人の生徒にみられないまま 現場から消えたと言うこと??

黒岩 そうなるね 川の幅は6メートル 条件次第の密室になる事件だ

青井 じゃ 犯人は その8人のなかかな

黒岩 現段階では しばらくするのは そうなるかな?

生澤 私たちが できるのは ここまでなの?

黒岩 せっかく ここまで調べたんだ 絶対にさくらの木に火をつけたやつ 影の放火魔をつかまえてやる じっちゃんの名にかけて
!!

青井 健吾のおじいさん 普通の人でしょ (一一一)

生澤 ところでさ 何で この8人ここにいたの? ふつうだったら 誰にも見られないところ行くのに ねえ・・・夕菜

青井 Σ(口一一一) お願いだから 私に振らないで

生澤 いちやいちやを 人にみられたい 人たちばかりだったのかな・・・エッチ!!

黒岩 ?・・・・・・? なにか 引つかかる・・・・なにかが・・・・・・キタ(。

。)!!!!!!! 俺の推理が正しかったら 影の放火魔は そのとき その場にいたんだ 委員長 昨日の現場に居た人たちを 昨日の同じ時間に 集めてくれ あとは 先生に言えば わかるからさ 俺 これから 薬研先生のところにいつてくる

柊 先生が 犯人なの??

黒岩 いや 違うから安心して・・・それより 放課後現場で・・・

緑川 じゃ 俺も全員に召集かけるよ
そついつて 全員は謎をのこしたまま 放課後をまつのだった

名探偵登場3

黒岩 みんなに集まってもらったのは 影の放火魔の正体をみんなに見てもらうため

黒岩は メンバーに話したことを再び 昨日ここに居た人たちに話をした

黒岩 で・・・・俺が なぜと思った事が 解決したらすべて 謎がとけたんだ 薬研せんせい もってきていただけましたか

薬険先生 ふむ

黒岩 先生は 頼んで置いたものをお願いします その前に 昨日ここに居た人にお聞きしますが?

生徒 はい

黒岩 みなさんは あの時間に みんなに見られていても みんなが一緒にいた 理由あるんですよね

生徒 ・・・・・・・?

黒岩 じゃ 昨日を再現してみましよう みなさん 一緒にいたみたいなので 昨日と同じ場所に座ってください

生徒は とりあえずと言う気持ちで 言われたままのように座った
ソロソロかなと 時計をみる 黒岩

黒岩 なぜ 皆さんが この時間に この場所に集まって座って
いたか？ しかも お互いみれるし 橋のほうからも 見られてしま
うのに この場所に座るのは 面白い関係あるんですよ それは
アレだ・・・

と黒岩は 校門の法を指差す

黒岩が 指差したほうをみると 全員はハッとして 目をつぶって
しまった

黒岩 そうなんです 木のこちら側に 座ると 太陽とは逆になる
ので 気にはしなくても この時間 みんなが 必然的に こちら
側に あつまって 座るのです そう 向こうは まぶしくて 座
っていられないですよ この時間は 太陽は南から西に傾いたば
かり 皆さんが 考えないで座るのが 北側の橋の見えるほうとな
るわけなんです

黒岩 それに昨日は 体育祭のため いつも以上に ごみが多くな
る その偶然がかさなったのです

黒岩 先生 どうですか？

薬研 もうはじめたぞ

黒岩 木の逆側みてください

そこをみると 木からまた 黒いけむりが 小さく出ていることが
わかる

生徒 また 火事が起こった〜

黒岩 先生もう大丈夫です

先生が 一メートルほど移動すると 木からのけむりは見えなくな
った

- 黒岩 そうです 影の放火魔は君だ！！・・・
と 黒岩は指をさす そこには ペットボトルがあるだけ

黒岩 そうなんです 火事の原因は 生徒が捨てていったと 思われるペットボトルなんです ベットボトルが レンズ効果を生み 今回の火事になったのです わたしは この事が 原因と気がつく と 先生に頼んで 先生が研究している 天体観測シュミレーションと エネルギの蓄積シュミレーションを つかって 今回の原因の因果関係をわかりだしたのです 先生ありがとうございます ・ ・ ・ とりあえず 仮説として 報告の方よろしく おねがいします

生徒 そうなんだ 日ごろの私たちの行いが 火事を招いてしまったのですね

黒岩 こんかいは これくらいで だいじょうぶだったが 次回が おこらないよう 俺たちもきよつけるべきかと

生澤 みてみて 昨日の こげたとこの横を

そこには ちっさいけど 新しい芽がでていた ・ ・ ・ ・ ・

先輩とのデート

校門前

大きな キャンピングカーが 校門の前に止まった ちょうど生徒の下校の時間にかさなったため その大きなキャンピングカーは 注目の的になってしまった

生徒A みろよあれ ・ ・ ・ すごいじゃん 誰の迎えだよ

生徒B ほんと すげー ・ ・ ・ 最新型だよ ・ ・ ・ あれ

生徒A 俺もあんなのに 一度乗ってみていな

生徒B みろよ 誰か降りてきたぞ

キャンピングカーのドアが開き 一人の 男が生徒と夕葉が 集まっている場所に歩いてきた

男 青井さん お迎えに参りました

生徒A 本当かよ 青井すげー

青井 ちゅっと まってよ 私の家のじゃないよ それに 君

ねー 普通・・・もう少し目立たない車でこないー しかも下校真っ
只中に校門にのりつけて

男 あいにく この車しか あいてなかったの で すみません・・・
ささ・・・急いでください

夕菜は しぶしぶ 車に乗り込んだ

生徒B 今度俺も乗せてくれよ 青井

青井 だからわたしのじゃないっていつてるでしょー

ドアが閉まると 車は静かに走り出した

車の中

夕菜はキャンピングカーに乗るのは はじめてらしく 興味心身に
あたりを見た

青井 そついえば 君・・・確かこの前わたしの席を取ろうとした人？

男 はい・・・御堂三のマネージャーをしています 佐々木ともう
します

佐々木 先日は失礼いたしました

マネージャーは ポケットから名詞を取り出すと 夕菜の前に差し出
した

夕菜は 受け取りながら マネージャーに質問をした

青井 マネージャーって仕事大変なの？

佐々木 まあ仕事事態は大変ですが やりがいのやる仕事と思っ
てます

佐々木 前方のケースをあけると 冷蔵庫の中にジュースがありま
すのでよろしければお飲みください

青井 おおー でもいいや ご親切にどうも・・・わたし これ
から 特大パアフエに挑戦するので我慢する

佐々木 つきましら お知らせしますのでくつろいでてください
・ 15分ほどでつきます

青井 ラジャ マネージャー 安全運転でよろしく！！

佐々木 ハイ！！　かしこまりました

カフェテラーゼ

カフェテラーゼに　着くと　もう　御堂先輩は着てて　夕菜の事を
席から手を振っていた

青井 先輩　今日はお誘い　ありがとうございます

夕菜は軽く会釈をした

御堂 ご苦労様　マネージャー　君はどうする？

佐々木 私は・・・まだ、今後のスケジュールの調整がありますので
このまま失礼いたします

御堂 ああ　解った・・・じゃ　明日　朝5時にお願いする　たし
か　明日は映画のうちあわせだったよな？

佐々木 はい・・・先方の方には　7時には到着すると伝えてありま
す　では　5時にお迎えに上がります

佐々木 しつれいします・・・青井さんも　楽しんでください

青井 あっ！！　青井は立ち上がり佐々木さんにおれいをいった
マネージャーが出て行くと　椅子に座りなおし　改めて御堂先輩に
挨拶をした

御堂 どう・・・この店の感じは？？

青井 は・・・はい　とてもいいです

御堂 そんなに硬くならないで　リラックス　リラックス　青井さ
んらしくないよ

青井 夕菜は　先輩が居るので硬くなっているのではなく　あまり
にも店の感じが豪華で　青井にとつて知っているのは　ファミレス
か　よくて　家族と行く小さな家庭料理の店ぐらいであった

青井　なんか　緊張しゃって・・・わたし　こんな　レストラン来
たのはじめてなんです

御堂　はははは・・・あっ　お待ちの　特大パフェきたようだ
夕菜の前に　いつも食べている　3倍ぐらいの　パフェがおかれた
青井　これが　あの・・・あの・・・夢にまで見た　特大パフェ・
・・・　苺にパイんに桃にバナナ　りんごに・・・・・・　今まで食

べた パフェのコラボレーションだ

御堂 ゆっくり食べなよ

青井はーーーーい
いただきまーーーーす

御堂 青井さん???

青井
・
・
?
?

御堂 俺のいま出ているドラマって見てくれてる

青井 うん みてるよ

御堂　それで感想は??

青井 うん いい感じではないの・・・感想きくなら 私より私の友達の志保にきいたほうがいいよ 彼あのドラマの大ファンだし わたしは それよりそのドラマの主題歌の方が結構 ファンかも・・・あの 何でしたっけ あの曲？

御堂 ああ 高坂沙織の 未来に輝いてだね あの曲 青井さん
好きなんだ・・・

青井 はい・・なんか切なくなるいいきよくですよね

青井 C D 買おうとおもっているくらいなんです

[illegible]

御堂 近いうちに 次の仕事の事で プライベートで 会う事ある
と思うので

御堂 そのお友達の……

青井 志保・・・ 琴葉志保

御堂 その 琴葉さんもいつしよに 会わせてあげるよ

青井 おお、彼女かんげきするな、志保にいつとくね・・・約束したよ

御堂 任せといて

御堂 そろそろ 次の撮影があるから・・・青井さんもきますか？

青井 ご迷惑かかるし 知らない人ばかりなので 遠慮しますよ

御堂 そうか・・・じゃ いま タクシー呼ぶので・・・それでかえったら

青井 大丈夫ですよー すこし 買い物したからかえるので

御堂 そうか じゃ行こうか？

青井 きょうは 本当にありがとうしました

御堂 いえいえ こちらこそ楽しかったよ また、今度仕事がおффになつたら どっか遊びに行こう おしのびで とくに 学校のみんなには 秘密だよー

青井 わかつてますよ・・・あの 取り巻きの人たちに 今日の事知られたら殺されてしまいます

御堂 ははは じゃ気をつけてかえってください

青井 失礼します

ふたりは カフェを後にした

サマーキャンプ

先生 おーい みんな席に着け これから夏のキャンプについて説明する

生徒 オオー まってました

先生 これは 一年生だけの特別行事だ みんなも 学校に入学して 4ヶ月経つ そろそろ 仲良くなつた人同士の連帯感みたいなものが生まれて来たとおもう そこでた 学校として そんな仲良しグループで 今まで以上の連帯感を育てるのが狙いだ キャンプ中に色々な体験をして グループで何をするかも重要な課題だ 部活の合宿に参加されるものもあるし うちの事情で参加できないものもあるとおもう・学校としては このサマーキャンプの参加の強制はしない・・・すべて自由参加だ まずは参加方法は3つだ 1 クラス内で5名から10名ぐらいのグループを作り リーダーになるものが 参加申請する 2 参加はしたいが 入りたいグループが決まっていけないものは 先生にきめてもらう そして 最後に 3 この人がいるグループに入りたいと 明記する すべての方

法とともに 参加申請を親の承諾証と一緒にだしてくれ これを機会に新しくグループに入れてもらうのも手だぞ 締め切りは3日後だ それまでに 親の承諾書といっしょに提出してくれ

生徒 先生へ質問

生徒 なんだ？

生徒 先生と同じグループ希望でもいいのですか？

先生 それは かまわない・・・だか ほかの先生とも一緒になるという可能性もあるぞ

生徒 ええゝ もしかして 薬研先生もですか？

先生 もちろん 可能性はある

生徒 いやゝゝ

後のことは このパンフレットに書いてある・・・よく 注意書き読んで参加してくれ 緑川みんなに配ってくれ

緑川 はい！！

生徒 だれか オレのグループ入りたいやつ

生徒 ・・・・だれもない

生徒 なんだよゝ

緑川 オレもグループ作るかな？ オレがリーダーな 柊はサブリーダーでいいだろ？

柊 わたしですか？

緑川 もちろんきまつてるだろ・・・

柊 わかったわ

柊 夕菜はどうするの???

青井 わたし まだわかんないな

琴葉 わたし 夕菜と一緒に ♪

生澤 わたしもゝ ♪

黒岩 俺もいいかな 入れてもらって??

山本 健吾が 入るなら 俺も俺も・・・

柊 夕菜人気あるね

緑川 それじゃ 青井もオレのグループに入れてやる

青井 なんて 私が君のグループにいられてもらわないといけないのよ
夕菜は断固拒否をしようとした思ったが 夕陽が 手を合わせているのを見て 仕方なく誘いわ受けた

緑川 これで7人が 一応規定には達したな このメンバーで参加申請出すか?

緑川 サブリーダー申請の方を出しといてな・・・

柊 えっ??

青井 リーダーがださないと いけないんだぞ そんな事すると
薬研先生のグループになるかもよ

緑川 それじゃ オレが出しといてやる

青井 だから・・・と言おうとしたとき 夕陽のほづをみると

また 夕陽は手をあわしている

青井 わかったは おねがいします リーダー

緑川 じゃ 早々に提出してくる

緑川は 紙にメンバー名を書くと 早々に教室をでていった

柊 ごめんね夕菜・・・委員長の誘いうけてくれて

青井 気にすることないよ 夕陽の頼みは 断れないし

青井 たぶん 委員長すぐもどってくるし

柊 なんで???

青井 だって 親の承諾証と一緒に出さないといけないと 先生言
ってたもん

柊 はははははははは

生澤 でもこの注意書きつても色々書いてあるね

学校の校則をまもり 学生としての自覚を持つこと

青井 パス!!

酒 喫煙 または 男女間の学生にあるまじき行為は禁止

青井 それは 私は平気

横をみると れいみが 夕菜の方を向いて ウィンクしていた

青井 ・・・・

黒岩 こんかい はじめてグループにいれてもらってありがとうございます
ざいます

山本 俺なんか入って迷惑かな?

青井 迷惑なんて とんでもない 大歓迎だよ

生澤 夕菜がいろいろというなら なんでも OK

琴葉 わたしも♪

青井 その他は・・・なんか 読むのめんどろ だれか 読んだら
後で通訳してね

柊 後で私がおしえてあげるわ

青井 あんがと・・・ちいさい 活字は眠くなる

生澤 二度目の夕菜との一緒のお泊りだ ♪・・・と夕菜にだけ聞こ
えるように言った

生澤日記

- - - いなはの日記 (ネットブログ)

- - - 7月×日

- - - もうすぐ夏休み……

- - - 夏休みになったら毎日アイに逢えないよ (TT

- - - えっ、デートすればいいじゃないの?

- - - ……ダメなんです (TT

- - - アイは夏休みは結構忙しく予定ビッシリなんだそうです。

- - - あっ、でもねでもね、夏休みはじめにキャンプがあるので、

- - - そのキャンプの班割があつて、
- - - なっ……なんとアイと一緒にの班になつれました！！
- - - ……とっても嬉しいです。

- - - でもね悩みもあるんだよ。

- - - 先日、アイが知らない人と仲良くしていたのを
- - - 友達が見たつて言うんです……信じたくは無だけれど
- - - ちよつとだけ気になってします。
- - - 思い切つてアイに訊いてみるべきかな？
- - - でも、それでギクシャクにはなりたくないよ（ＴＴ

いなはさんへ・・・メール送信 From 涙

- - - 7月×日

- - - よかつたじゃないですか

- - - 同じ班なのですか

- - - キャンプというと 特に夜は二人つきりになれるし

- - - ますます・・・彼氏と接近するチャンス

- - - 一気にあなただけの彼氏に・・・

- - - 失礼しました・・・失言です（＾ ｾ ; ）＜

- - - やはり 必須アイテムは線香花火かな 二人ですればいいかも

- - - それか ねずみ花火で 怖がつて 彼の胸に・・・

- - - 失礼しました・・・失言です2 です（＾ ｾ ; ）＜

- - - 絶対に 二人だけのあたらしい 思い出作ってください

- - - 前に日記で料理が得意といつてましたよね？

- - - キャンプっていうと 料理も自分で作るとありますが

- - - ほかの女の子より うまいって事みせつけてあげてください

- - - ああ 貴方が彼女だったら 私は無理だなと ほかに子に思
わすように（＾ ｾ ）

-
-
-
また
お便りします

第4章 文月（ふみつき／ふづき）の章（後書き）

第四章お読みいただきありがとうございました

よろしければ評価欄に足跡を残していただければ幸いです

第5章 葉月^{はづき}の章につづく

第5章 葉月（はづき）の章

飼育小屋

飼育小屋の掃除をしている琴葉

柊 「琴葉さ〜ん・・・」

琴葉 「あつ 柊さん こんにちは」

柊 「琴葉さん えらいね〜 夏休みなのに 毎日ちゃんと 飼育小屋掃除ちゃんとして学校に来るなんて」

琴葉 「飼育委員ですから〜当たり前ですよ」

「柊さんも 夏休みなのに、副委員長の仕事 おつかれさまです」

柊 「夕菜とえらい違いだ」

琴葉 「はははは・・・ でも夕菜もなんか 色々と一生懸命にしているよ 今日学校に来ていたし」

柊 「うんうん・・・ 騒がしい所を探すと 必ず夕菜居るものね」

琴葉 「騒がしい所に 夕菜が居るのではなく 夕菜が騒がしくしているとも思うが」

柊 「ははは・・・」

「ところで 夕菜はどこに？ キャンプの買い物で 夕菜必
要物ないか 聞こうとおもったの」

琴葉 「夕菜なら さっきまで 私とキャンプで どんなことしようかと 聞いていたとおもったら 思い出したように 走って帰りましたよ なんか 大事な買い物あるっていつて あわてて・・・」

柊 「そうなんだ じゃ、後で電話してみようかな？」

「では、お仕事がんばってください ヽ」

琴葉 「はい 柊さんもがんばってください」

買出し

柊 「ふうー。さすがに全員分となると重いね」

緑川「こんなの二人だけで行かせるなよー。こんな時だけ『委員長だろ』って押し付けやがって」

柊「でも、意外と見直しちゃった。食材のこととか詳しいんだね。ネギは深川ネギ！ってこだわってる人はそういないよー」

緑川「いや、そうでもないよ」（少し照れる）

柊「教室ではいつも騒いでるだけだし委員長の仕事もしてくれないから、もっといい加減な人だと思ってた。ごめんね」

緑川「どうせ皆にそう思われてるから。それより、その荷物重いだろ」

柊「これぐらいへっちゃらだよー」

緑川「身体弱いんだから無理すんなよ」（ぶっきらぼうに荷物を奪い取る）

柊「ゴメンね、ありがとう」

緑川「…別に」

柊「あの、あのね！えっと、委員長のこと少し苦手になって、思ってたの。あの！ごめんなさい！」

緑川「そんなに謝らなくていいよ」

柊「うん。…あ！お花屋さん！ハイビスカスだ！綺麗ねえ」

緑川「早くしねーと皆が待ってっぞ」

柊「あ、そうだったね。ごめん」

緑川「だからそんなに謝るなって！…それから、”委員長”じゃないくて”輝”でいいから」

柊「えっと、じゃあ、輝くん、でいいかな…？」

緑川「ん。まあ、いいんじゃない」

柊「うん！じゃあ今度から輝くんって呼ぶね」

青井「おっ！夕陽だ…！それに、お供の輝もいつしょ」

緑川「お供じゃねーよ」

柊「夕菜ちゃん、こんにちは」

青井「何してるのこんなところで、わがクラスの代表諸氏は？？」

柊 「何って、明日のサマーキャンプの買出しだよ」

青井 「それはそれは、ご苦労様…ちゃんと花火もたくさん買つてね…それにプリンと…それから……」

緑川 「そんなの自分で買えよ…」

青井 「君には言つてません！わたしは夕陽に言つてるの！」

緑川 「そうかよ」

青井 「そうだよ！いい！だ！！」

柊 「まあまあまあ、二人とも落ち着いて。で、夕菜ちゃんは何してるの？」

青井 「もちろん、サマーキャンプの買い物さ！とくに必須アイテムの水着…」

緑川 「水着は学校指定のしかだめなんだぞ？おまえまた、先生の話のとき寝てただろ？」

青井 「ええ…だめなの？せつかく、むちゃ可愛いやつを奮発して買おうと思つたのに…。はは…ん 実は一番そのことにチエツクいれてたのは、君だろ」

緑川 「そ、そ、そ、そんなこと無いぞ」

青井 「図星だ！…！ず、ぼ、し…：エツチな輝、みんなに言つちやあ！！」

柊 「夕菜ちゃんったら、もう。水着は輝くんの言う通り、指定のものだよ」

青井 「それは残念だ…ダーっていう水着を買おうと思つたのに…。輝には見せないけど…ふん！！」

柊 「夕菜ちゃんっ！！」

青井 「うつ。怒られた……」

柊 「まったくもう。あ、花火はちゃんと買つたからね」

青井 「よし！じゃあ、邪魔者の夕菜は退散しまゝす！」

「またね…よろしくね…」というと 夕菜は小走りで 商店街の向こうにはしつていった

緑川 「何なんだ、あいつは全く……」

柊 「いいからいいから、あれが夕菜ちゃんなんだから。それより、
買い物が終わらせないと、ね？」

サマーキャンプ

先生 さてと サマーキャンプがいよいよ 始まるが ミーティン
グにいったように 生徒の自主性を育成するために 先生の方から
の手助けは一切しない グループで考え 自分たちの計画にのっ
とって 行動するように ただし、困ったこと 自分たちで解決で
きないような 問題が発生したときは別だ ドンドン相談だけはす
るように・・・この 今日からの3日間は 宿泊する場所の海岸と

学校に向かう道以外は 出てはいけない 事前に各グループに計
画表を作成してもらって 各先生方からのアドバイスはいただいた
と思うが 用意してきたもの 買ってきたもの以外の 今からの買
出しは禁止だ グループごと 個人ごとの交換だけで3日間を過ご
してほしい もちろん 今回キャンプに参加されていないものから
の 持ち込んでもらうのも禁止だ あえて 形態は禁止にしてない
が その点をちゃんと 守ってほしい

合同行事は 朝と夜の 報告会 明日の合同水泳大会 明日の夜の
キャンプファイヤーだけだ では、グループごとに 分かれてリー
ダーの指示で行動するように

グループ活動

緑川 「じゃ うちのグループの人は集まって・・・いそいで」

緑川 「これから3日間 グループとしてやっていくわけだが・・・
オレのグループは・・・」

青井 「あんたのじゃないだろう・・・ボソツ！！ 小さい声
で」 q（-o-）

緑川 「青井君 ちゃんと聞いててください！！」（#、皿、）

青井 「はい！！」（><）

緑川 「仲間の協力を軸に すごしたいと思います」

リーダーの オレの指示に従ってください」

「あとは 各責任者をきめましょう」

緑川 「今回のキャンペーンは 柊さんお願いします」

緑川 「料理の担当は・・・えつと??」

黒岩 「オレやります」

生澤 「わたしも やりたいです」

緑川 「じゃ 二人にお願いするかな」あとの人は 個々に協力できるところを サポートに回って下さい」

まずは 夕食のしたくだな」 「山本君と 琴葉さんは テントの設置と 用意した食器の洗いね」 「青井君は まき 集めてきてください」

青井 「ええゝ なんでゝ おもいよゝ めんどくさいよゝ」

柊 「夕菜 わたしも行くから いっしょにしょ」

青井 (; n ;) 「うんうん」 「で・・・その リーダーさんは何を??」

緑川 「オレは 全体の進行状態をみてるよ」

青井 「それは ずるすぎ・・・」 (。 D) ゴルア!!

山本 「じゃ リーダーには まだ持ってきてない 荷物を一度学校に取りにいつてもらえば ほかの人は 担当きまつているので」

黒岩 「うん それがいいな でないと 料理の準備にとりかかれ
ないし」

青井 「だそうです・・・委員長ダッシュで よろしくおねがいします」 (´Д`) /

緑川 「わかった そうするよ・・・というと 学校のほうにはし
つて 向かった」

青井 「じゃ みなさん よろしくおねがいます 私は林に散歩
に・・・もとい、薪あつめに向かいます・・・」

薪ひろい

青井 「ねえねえ 夕陽 委員長とはどうなの?」

まきを集めながら夕菜が聞いた

柊 「うーん どうか？」

青井 「またまた 隠しちゃって・・・」(・)

柊 「そんなことより 夕菜はどうなの わたし知っているよ？」

青井 「やっぱ ばれちゃっているんか」 「わたしのところは 平

行線だな あいつ 忙しすぎだし・・・ほとんどの会話が携帯だよ」

柊 「それもつらいね」

青井 「うん・・・みんなと遊んでいるときは いいけど なんか

学校でカップルみると (#、皿) ムキー！って感じになる」

柊 「ぶっ！！ 夕菜らしいね」

青井 「あっ こんなとこに きのこが・・・たべられるかな？？」

柊 「やめときなよ・・・色がなんだか 変だし・・・」

青井 「だね・・・いかにも 薬研先生がもっていると 絵になり

そうな色だ」 薬研「このきのこをだな・・・ふんまつして・・・

ふふふふ」先生口調

柊 「夕菜つたら」(ハ・ハ*)

炊事場

黒岩 「こんなものでいいかな？ 竈のよういは？」

生澤 「いいんじゃない・・・おつかれさま なんか飲む」

黒岩 「サンキュ！！ と生澤からジュースを受け取った」

山本 「僕らの方も終わったよ」

音葉 「うんうん 手際よかつたしね」

生澤 「私のほうも食器のあらうのは おわったわ 後は委員長

が 材料もってくれば 始められる」

青井 「おゝい もってきたぞ」

生澤 「おつかれ」

青井 「おっ すごい・・・竈って こんなに場所つかうんだ」

青井 「もう一個つくれないかな」

黒岩 「なにに使うの？」

青井 「もちろん 落とし穴・・・委員長を落とす」

柊 「夕菜！……！！」 - 青井 「冗談だよ〜」 (；´・`、)

柊 「夕菜がいうと 冗談にきこえないよ〜」 (>ω<；)

青井 「ところで 今日のメニューはなんですか？ 生澤料理長」

(^ ^)〜♪

生澤 「えっと カレーとサラダと あとはいくつかの フルーツ
ですね」

青井 「もちろん カレーは こってりで・・・大き目のあつあつ
野菜ふんだんかな」

柊 「委員長 なんか 葱もかってたわよ??」

青井 「カレーに葱って??? いいよ 委員長のカレーだけ葱い
れちゃえば・・・解らないよ」「委員長 作るものちゃんと 知って
いたのかな???」

柊 「知っていたみたですよ ちゃんと カレー用の材料買っ
ていましたし」

青井 「じゃ マジで葱 どうするつもりだったんだろう?」「れ
いみ なんか葱 つかいみちない??」

生澤 「たぶん 朝食のために買っていたのでは・・・」

柊 「そっだよ」

青井 「そっか・・・私もそっだとは おもってはいた・・・」

生澤 「夕菜は夕食のことだけで頭 いっぱいなね」

青井 (- | - ;) 「じゃ 委員長がくるまで まったりします
か」

柊 「わたしちょっと 見てくる委員長を・・・」

生澤 「夕ちゃんやさしいね」

柊 (〃^ ^〃)

山本 「いい およめさんになるな 生澤さんは・・・」

柊 「ジャちよつといってくる〜」

男B 「がんばってね〜」

青井 「なにをがんばるんだか??」 (「ー」)

夕飯

生澤 「みんな、カレーできたよ。ごはんによ。」

山本 「おお。オレもう、腹ペコペコだよ。」

琴葉 「すごい。まるで、キャンプ料理じゃないみたい。」

生澤 「黒岩君がずいぶん、てつだってくれたしね。予想以上に良
いできかも。いっぱい食べてね。」

青井 「うまー!! お野菜、ホクホク・・・こんなにでかいのに、
柊 「なんか秘訣でもあるの??」

生澤 「夕菜がおやさい。大きいのがいいっていったので、ちよつ
と、技使ってみました。」

青井 「ふむふむ。ありがとう・・・もう食べるのに夢中で、人の
話きいてません」

柊 「そのわざというのは??。よかったら教えていただけます
か??」

生澤 「はい。それは、煮込むと材料が、崩れてしまうので、最初
に、大きめに切った材料をカレー粉をまぶして、蒸したのです・・・
そうすると、荷崩れおこさないし、大きめでも、ホクホクに仕上が
ります。材料に、カレーの味もついていきますし、油もすくなめです」
柊 「いいこと聞いた。今度うちでもやってみよ。」

生澤 「ほんとうは・・・黒岩君のアイデアなんだけどね。悩んで
いたら教えてくれた」

柊 「すごいね。そんなこと知っているなんて」

黒岩 「いやいや。生澤さんが、オレの言っていること、すぐ理解
してくれた。結果ですよ」

生澤 (ハ・ハ・ハ)

青井 「お代わり」 ノ

生澤 「はいはい」

緑川 「青井君は 食べてるときだけは 静かだな・・・」

青井 Σ（「口」；）

生澤 「食べ終わった方は 食器 その皿にいれといてください
後で私が洗います」

青井 「私も洗う」

生澤 「おねがいします」

洗い場

夕菜と生澤が 食器などの後かたづけをしている

生澤 「夕菜、おいしかった？」

青井 「うんうん・・・超、うまうまでした」

生澤 「よかった」

生澤 「かたづけ 終わったら・・・さんぽしませんか？」

青井 「いいよ」

生澤 「わたし 線香花火もつてきたの」

青井 「おお ロマンチックですね でも花火は明日では??」

生澤 「うん 夕菜と二人だけでしたいの・・・ダメ??」

青井 「いいよ・・・いっしょにしようか」

生澤 「うれしいな、じゃ早くかだすけちやあ」

浜辺

夕菜とれいみは 浜辺の片隅で 二人だけで線香花火をした

生澤 「ひさしぶりだね 夕菜」

青井 「何が??」

生澤 「二人つきりでこうやっているの」

青井 「けっこう でかけてるじゃん 買い物とか・・・」

生澤 「うん そのことじゃなく・・・」

生澤 「だって 二人きりで ロマンチックに一緒にいた事ないじゃん」

生澤 「れいみ サマーキャンプ ずっと楽しみにしてたんだ」
生澤 「また 二人きりで ロマンチックな夜 すごせるって」
夕菜は自分の持っている 線香花火の火をじっと見ている

生澤 「線香花火って なんかさびしいね 私たちみたい」

青井 「なんで??」

生澤 「だって 明るく燃えていたと思うと すぐ 消えちゃう
私たちの二人の時間みたい」

青井 「・・・・・・・・・・」

生澤 「夕菜 何考えてるの??」

青井 「なんにも考えていないよ ただ 火をみているだけ」
そのまま 夕菜は黙り込んだ

合同水泳大会

浜辺

先生 「じゃ 選手対抗の リレー水泳始める

各チームのメンバーは 力を出し切って がんばってほしい ルールは 男女ふたりずつの 計4名のメンバーで 1チームだ その中で 2人が水泳 2人が短距離だ 決して一位が目標でなく 力をあわせてゴールする事が目標だ そこで 先生方も ある条件で 1位とかをきめようと思う 条件は秘密だ 結果を楽しみにしてくれ 30分以内に ここに居る全員で 4名1チームを作って

参加登録を出してくれ じゃ スタート」

生徒は おおのの仲良しグループ内で 参加チームを作り始めた 男子しか居ないチームは女子のチームに誘いをかけたりしている

緑川 「じゃ うちのチームからも1チーム参加させよう」 「・・・・・・・・・・」

青井 「あれ、今日は 俺がリーダーだからといわないの 委員長」

緑川 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

青井 「泳・・・・げ・・・・な・・・・・・い」

緑川 「俺 およげる・・・・でも 勝つには 俺出ても無理かと思うので・・・」

山本 「俺 水泳でもいいよ・・・・ここはグループに入れてもらった 恩返しと思って」

琴葉 「私も走るほうに出る」

緑川 「あとは????」

青井 「私も走るほうでるぞ」

生澤 「夕菜 がんばってね」

青井 「おう!!」

山本 「黒岩 お前も出るよ・・・・恩返ししないと・・・・男がたないだろ」

黒岩 「そうだな・・・・微力だが 俺も参加するよ」

緑川 「4名出たみたいだな 順番はどうする・・・・最初は走りみたいだし」「とにかく 走るのが女の子なので 男水泳チームはその手助けして がんばるほうかいいかもよ」

山本 「そうだな 夕菜が最初に走り 黒岩が次 で 琴葉が行って アンカーは俺でいいか」

青井 「チームリーダーに任せます」

緑川 「じゃ それでメンバー表だしてくるよ」

青井 「チームリーダーの 山本がね・・・・」

緑川 「・・・・・・・・」

先生 「あつまれー」

先生 「これから サマーキャンプ恒例 混合リレーをおこなう第一走者 スタートラインに集まれ」

先生 「第一走者は向こうに見える 旗のところにおいてある 赤い たすきを取ってくる 第二の水泳走者は 1キロ沖にある 飛び込み台から 緑 第3走者はまた 旗から黄色 そして アンカ

「は 沖から白のたすきだ すべてを渡し合いながら4本のたすきをもって ゴールしてくれ 安全のため 先生の船が 沖では何艘か待機しているので むりをせず がんばってくれ 検討を祈る」

先生 「第一走者 よい スタート」

生澤 「夕菜 がんばって」

夕菜は 一生懸命 旗にむかって 走り出した

山本 「おおー 夕菜けっこう マジで早いー うそじゃなかったんだ」

黒澤 「本当だー 彼女けっこうやるね」

柊 「夕菜 早いー!」

黒岩 「面白い子だな 夕菜は・・・」

山本 「うんうん・・・もう少し 背があれば 結構美人かもな」

黒岩 「わかんないぞ 3年もたてば・・・見違えるような子になるかもよ」

黒岩 「今のうちに彼女にしたらどうだ!」

山本 「よせやい・・・いまは 俺は格闘命・・・絶対 インターハイでるんだから」

黒岩 「おまえ 見かけによらず硬派だな」

山本 「古臭いかな・・・そんなお前はとうなんだ?」

黒岩 「そうだな? とにかく 3年あるんだしじっくり探すよ」

「おっと 夕菜が戻ってきた・・・さすがに男には負けているけど女子の中では一位だ」

黒岩 「夕菜ー こっち こっち・・・」健吾は 大きくてをふって 夕菜に教えた 「よつしゃ 挽回してくる」

健吾は 夕菜へたすきを受け取ると 海に向かって走り出した

青井 「はあはあはあー 任務終了」

琴葉 「夕葉がんばったね 女の子の中では一位だよ」

青井 「ありがとう・・・はあはあはあ・・・」

山本 「夕葉 おつかれさん 多分 黒岩が挽回してくれるよ」

青井 「期待しています」

山本 「黒岩は ああ 見えても スポーツすごいんだよ 中学時代 俺と学校代表あらそったんだから」

青井 「そうなんだ・・・えっ?? もしかして すごい水泳うまいって事?」

山本 「うんうん 市の代表だったしねあいつは」

琴葉 「すごい それに争った 康介君もはやいつてこと?」

山本 「あいつには 勝てなかったけどね最後まで・・・」

青井 「みてみてみてみて 健吾・・・トップにでたよ・・・・・・」
・ 「志保がんば」

琴葉 「はい がんばります」

山本 「黒岩 ダントツだな やはり・・・うんうん」 「よし 志保 無理せずがんばりな」

琴葉 「いつてきまーーす」

黒岩は ダントツリードで たすきを志保に渡した

黒岩 「はあはあはあ しばらくぶりの泳ぎは つかれるな」

山本 「よくやったほうだよ おかげで 志保が余裕あるし」

青井 「みなおしたよ よく見ると 健吾も康介もいい体してるじやん」

黒岩 「よせやい・・・」

山本 「あとは 志保の努力しだいでは 優勝だ・・・」

青井 「秋には2人の 下駄箱がラブレターでいっぱいかも」

青井 「要らなかったらわたしに頂戴」

山本 「何で夕葉にあげるんだ!!」

黒岩 「志保 もどってきたぞ だいぶ抜かれているが お前なら

問題ない……」

山本 「志保 こっち」

志保から たすきを受け取ると アンカーの康介は 抜かれた相手を追って海に向かった

青井 「志保おつかれ」

琴葉 「だいぶ めかれちゃったね……はあはあ……」

青井 「へいきへいき 気にしないきにしない……」

黒岩 「みてみる 康介……追い上げすごいよ……もう2人抜いた」

琴葉 「康介」 がんば」

たすきを取った 康介は……岸に向かい始めたときには残り一人を残すのみに追い上げた

青井 「がんばれ」 がんばれ」

みんな 声がかれるくらい 応援をした

黒岩 「そこだからあと すこし」

琴葉 「やった」 トップだ」 もうすこし」

山本は 岸に着くところに 最後の走者を抜いた……

最初にゴールをきつたのは 山本だった

全員 「やった」 優勝だ」 ばんざい」 ばんざい」

みんなが 康介の周りに集まった

表彰式

先生 「では 今回の大会の優勝の表彰をする」 - 「タイム

一位は 青井 琴葉 黒岩 山本 グループ」

生徒 「おお……」

先生 「しかし 大会が始まる前に言ったが今回は参加する事に意義を持つ大会なので 君たちが春におこなった体力測定の結果を考慮に 全員の参加メンバーのデータから 考慮して 一番向上が認められた 日下 鈴木 吉田 剣崎 グループが 今回の優勝だ
みんな よくがんばった 前回の成績より下回ったグループは なかったぞ おめでとう 全員が優勝といってもいい」

青井 「惜しかったね」

山本 「うん けど・・・これも いい判断かもね」

琴葉 「うんうん・・・早いだけだったら 運動している人たちが有利だしね」

青井 「みんなお疲れ様」

琴葉 「おつかれさま」

キャンプファイヤー

青井 「じゃ サマーキャンプ恒例の怪談話はじめまーーす」

友達 「え〜」

青井 「これがないと サマーキャンプになりません 最初わたしから行くね」

青井 「これは 先輩から聞いた話なんだけど・・・」

友達 「あるあるね そうした話はどこにでも・・・うそで こわくないんだよな」

青井 「この話は 本当ですよ たぶん・・・でもあまり怖くないかも・・・」

友達 「よかった」

青井 「でははじめます」

「これは この学校の話だけど 先生って 順番に学校に当直の仕事があるんです ある新米の先生が当直のときにその事がおこったのです」「その先生が当直のとき 先輩の先生が いたずらを仕掛

けるため 新米先生に「なんか当直の心得をおしえたんだって」

先輩先生「今日 ○○先生あなたが当直でしたね」

新米先生「はい この学校に来てはじめての当直です」

先輩先生「そこで すこし知らせておくことがあるのだが・・・」

新米先生「なんでしょうか？」

先輩先生「うん 君は東階段の三階に向かう踊り場の所に 大きな鏡があるのをしっているよな」

後輩先生「はい しっています」

先輩先生「あの鏡には なんか こわい噂があるんだよ」

後輩先生「またまた そんなことで私は驚きませんよ」

先輩先生「いやいや 忠告のためにしらせておこうとおもってな」

後輩先生「とりあえず 聞いておきますよ 先生がそこまでおっしゃるなら」

先輩先生「その鏡を 夜中の二時に見ると 中に幽霊が映っておいでおいでするらしく 鏡の中に引き込まれるそうなんだよ それから当直する先生はその時間には その鏡の前の見回りをしないことにしているのだよ」

後輩先生「そこまでいうなら 私もそのご指示にしたがいましょう」

・ 神隠しにあうのは いやですから はははは」

先輩先生が続きを話そうとしたとき 構内アナウンスで 生徒が怪我をしたと報告があつてその場を先輩先生は立ち去ってしまったのです

そのまま 新米先生は その日の当直に入ってしまったのだけど 二時間に一度構内を見回るのですが ちょうど当直室でうたたねをしてしまったため 運が悪いことに二時の見回りはちょうど あの先輩先生の言った鏡のある踊り場の順番だったのです

先生は そんな話は信じてはいないがあそこまでいわれると びびってしまったことも確かなんだよね

でもそこは 仕事とわりきって その踊り場の方へと巡回していて・・・いよいよ 鏡の前にさしかかったのです やはり 怖いから

かがみを見ないように　とおりすぎて・・・でもなにか　背中
ほうから視線感じたみたいなんです

先生「やはりここはこなかったほうがいいな・・・でも先輩も　俺を
驚かすつもりのはなしかもしれないし　ここで　びびっても　し
くだよな」

「よし　鏡を見て　俺は男だとあしたにでも言ってやろう」と・・・
先生は　そくと　鏡を覗き込んだらしいのです　そこには　確
かに曇っていて　まわりは　くらいので　自分の姿がぼやけてみえて
しまつて　うつっています

先生　「やはり　こんな　古い鏡だから何でも幽霊にみえるんだ
な」

「そんなわけで　何事もなく初当直はおわつたのです」

山本　「こわくないじゃん　夕菜の話し方のほうが怖いよ」
友達は　それほど怖くなかつたらしく　安心した表情にもどつた

青井　「まだはなしおわつてないよ」

山本　「????」

青井　「うんうん　その後の話があるのだよ」

新米先生は昨日の話を先輩先生に話したくて・・・先輩先生を探し
た　先輩先生は教頭室にいたらしく教頭先生と話していた　新米先
生も初の当直の報告を教頭先生にも話す予定でいたので　教頭室に
はいって　先輩と教頭先生に昨日の報告をした

新米先生「昨日の当直の報告に来ました」

教頭　「それは　ご苦労様でした　で・・・どうでしたか??」

新米先生「はい　ぶじ何事もなく巡回終了しました　先輩のご指導
受けましたが　あの噂の鏡も　幽霊ではなく薄暗さと鏡の原因かと
おもいます　先生もわたしをおどろかすと　おもい　お話なさつた
のでしょ」

後輩先生がはなしをしている最中にも　先輩先生の顔色がわるくな
ったのは　すぐ　気がついた

教頭 「その鏡というのは 踊り場の鏡のことですか？」

新米先生 「そうです 先生におどろかされましたが あの時間にみまわりに行きましたら確かに 普通の鏡で 暗さで 幽霊みたいに自分が映っていました」

教頭 「それは おかしいですね?? いま 先生がこちらにみえられたのも 昨日 あの踊り場の鏡が 昼すぎに生徒が割って今後どうしようかと 相談しに来たのです 鏡はあるわけないのですよ」

.....

琴葉 「うあ~~~~い~~~~や~~~~」

輝と夕陽―夜

緑川 「おいおい、大丈夫かよ柊。耳塞いですがー震えてるぞ」「ほんとだ。夕陽ちゃん、大丈夫?」

柊 「う、うん。怖い話が苦手で、あの、怪談とか怖くて……でも、あの、大丈夫だから!」

緑川 「ぜんぜん大丈夫じゃねーじゃん。なんなら気分転換に、ちよつと海でも見に行く?」

柊 「うん……ごめんね……ありがとう」

緑川 「気にすんなって、んじゃ、みんな悪い、行ってくるから」

懐中電灯を手に持つと、みんなから離れて砂浜を歩く二人

緑川 「どう?少しは落ち着いた?」

柊 「うん……輝く人と一緒だから……もう怖くないよ」

緑川 「はは……まあ柊が元氣ないと俺が困るしな」

柊 「え……それってどういう……?」

緑川 「い、いや、ほら、学級委員の仕事俺がしなきゃいけないんだろ?」

柊 「……ふふ、輝くんらしい」

緑川 「……らしい」って何だよ」

柊 「あ、ごめん！怒った？？」

今夜は月も出ておらず周囲は漆黒の闇。懐中電灯は輝が持っている。こんなところで怒らせて輝一人で帰られては大変と、夕陽は必死でとりなそうとする。

柊 「あの、でも、えっと、輝くんって学級委員の仕事も頑張ってるよね！」

緑川 「どこがー？無責任委員長って言われてるらしいけど？」

柊 「っ……！……でもあの、ほらっ！荷物持ってくれたりして優しいしっ！」

緑川 「だって柊は身体弱いじゃん。誰でも持つんじゃない？」

取り付く島がないとはこのことが。途方にくれる夕陽。輝は先ほどから黙って歩き続けている。足元でサクサクと砂が鳴り、波は遠く近く穏やかな音を立てている。どれくらい歩いただろうか。皆の居るテントの明かりはかなり小さくなってしまう、夕陽は心細さを感じ始めた。

緑川 「……あ」

柊 「えっ！？」

緑川 「そんなに驚かなくても……あそこ、海の家。自販機あるから何か飲んでく？」

柊 「うんうんっ！！」

- とにかく輝の機嫌が直らないことにはテントまで戻ることもできない。夕陽は輝が口を開いたことに安堵し、その提案に飛びついた。この先……自分の身に何が起るかも考えずに。

緑川 「はい、オレンジジュース。突っ立ってないで座れば？」

柊 「ありがとう」

緑川 「……柊ってさ、俺のこと嫌ってんの？」

柊 「ええっ！？そんなことないよ！どうして？」

緑川 「クラスの連中ほとんどが輝って呼び捨てなのに、いつまでも“委員長”だから」

柊 「や、やだなあ……。学級委員長だから、委員長って呼んでた

ただだよ？」

緑川 「入学したての頃は”委員長さん”だったもんな」

柊 「えっと、それは、敬意を表して……」

緑川 「バカにしてるようにしか聞こえなかったけど？」

柊 「そんなこと、ないよ！ほんとにつ！」

緑川 「……ふうん」

柊 「ねえ、ほんとよ？嫌ってもいないし、バカにもしてないよ？」

緑川 「……じゃあ、嫌ってないって証拠見せてよ」

柊 「えっ！？」

緑川 「嫌ってないなら、これくらい挨拶代わりだよね？」

輝の横に置かれていた懐中電灯がパチツと乾いた音と共に消され、突然の暗闇に困惑した夕陽が背に当たるゴザのざらついた感触で状況を理解したのは数秒後だった。

柊 「あつ……輝くん！？……ちよつと！や……っ！！」

「お！やつと戻ってきたか！花火するぞ、花火！」

少しバツの悪そうな表情の輝と、夕陽の頬に残る涙の跡、そして輝のシャツの裾を握っている夕陽の小さな手に気付いたものは誰もいなかった。

夕菜のお忍びデート

*** 突然の電話

青井 「次 夕菜いきまー！ーす」

山本 「まってましたー！！」

お互い持ち込んだカラオケそしCDで カラオケの真っ最中

その時、夕菜の携帯が鳴った

ピロピロピロリン〜ピロピロピロリン

青井 「ちよつと たんま〜」「もしも〜し 夕菜だよ〜」

「俺れ 光……夕菜いま時間ある？」

「うん どうしたの？」

「今確か
キャンプ中だろ」

「うんうん カラオケ中」
♪

「ちょっと抜け出せないかな？」

青井 「大丈夫かも……どこ行けばいい？」 「うんうん……
わかった」

聞き耳を立ててた 志保

「夕菜、どうしたの？」

夕菜は携帯を押さえて志保に聞こえる程度で言った

青井 「なんか 光がキャンプ抜け出してこないかと言ってきた」

「御堂先輩からか・・」

「夕菜 それまずいよ」

青井 「見つからなければ OKさ」

「しらないよ 見つかってても……」

青井 「そこは親友の志保が何とかしてくれると思う……。」

「そんな」

青井 「じゃ お後よろしくね」「今から 脱走いたします まつててね」

と携帯に向かってつぶやいた

森の中

青井 「周りに敵兵の影はない・・・」 「こんなところ一人じゃ絶対怖いぞ」「なんで こんなところに あいつは呼びだしたんだ」

「こんな所で あゝして こゝして・・・それから キヤ!!」
 「・・・ぽっ!!」

そのとき 夕菜の背後から 誰かに抱きつかれた……

青井 「キヤー！……妄想が現実……」

御堂 「俺だよ俺……夕菜」

青井 「なんだよ 君か・・・てつきり・・・」

御堂 「てつきり 何??」

青井 「なんでもない」

御堂 「呼び出して ごめん」

青井 「いいおゝ気にして無いし・・・」 「それに いま・・・
キャンプは カップルのいちやいちゃ中だし」

御堂 「良かった」 「実はさ・・・夕菜にプレゼント持ってきたんだ」

青井 「おお プレゼント」

御堂 「いつも 電話だけでは 申し訳ないとおもってね」

青井 「そんなゝ 君は仕事忙しいし 私はしょうがないと思って
いるよ」

御堂 「そう思ってくれると ありがたい」 「二日ばかり OFF
取れたので 夕菜に何かプレゼントしてあげようと ちょっと支度
していた」

青井 「二日もあったなら呼び出してくれても よかったのに・・・

御堂 「でもさ 夕菜キャンプ中だっただろ・・・それより なん
か準備して 夕菜にプレゼントしたほうが 喜んでくれると思って
・・・」

青井 「そうか・・・で プレゼントって??」

御堂 「もう少し 向こうに用意してある ほら向こうに 海の家
あるだろ あの後ろの丘越えた向こう」

御堂 「もうすこしあるけど ごめんね」

青井 「平気だよ」

御堂 「それより キャンプ大丈夫??」

青井 「平気 平気 志保がなんとかとりつくろってくれる」

御堂 「そうかそうか 持つものは友だね」

青井 「うんうん」

青井 「でも 光とこうやって 堂々と手をつないで歩けるとは思わなかったよ」

御堂 「俺もさ」

御堂 「今回も マネージャーが うまくスケジュール ごまかしてくれてるし まさかマスコミも俺がこうやっているとは思わないよ」

青井 「大変だね アイドルも・・・」

御堂 「確かに疲れるけど・・・いまの 俺の仕事だし・・・ここまで 来ると俺一人の問題では無いからな」

丘を越えると 一本のロウソクが 少し先に光っている

御堂 「あそこだよ・・・もう少し」

青井 「うんうん」

ふたりはロウソクの前まできた・・・ロウソクの明かりだけで 暗くてあたりは何も見えない

御堂 「すこし ここで座ろうか」

青井 「うんうん」

御堂 「夕菜は ロウソクの明かりすきなんだよね たしか」

青井 「うんうん じゃ いま 火がついている横の ロウソクに火をつけてみな」

御堂は そう言うつと マッチを夕菜に渡した

青井 「いまどき マッチなんて・・・」

御堂 「いいから 早くつけてみな」

夕菜が マッチをすると 二本目のロウソクに火がついた

すると どこからともなく 音楽が聞こえてきた

きつと~~~~未来の~~~~~~~~再び~~~~~

青井 「これって・・・」

御堂 「そう 君がすきだって言った 俺のドラマの主題歌」

前を見ると 二本のロウソクが 3本・・・4本・・・10本・・・
・だんだんと 火のついたロウソクの数が増えてきた・・・

青井 「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

それは 数が数え切れないほどの ロウソク・・・夕菜の前に
ロウソクの火による 文字が浮かび上がった

Y u n a L o v e s F o r e v e r

青井 「ええ~~~~~」

青井が 聞いていたのは CDの音楽ではなかった ようやく 目
が慣れてきた 夕菜がみたのは ロウソクの 少し先にある ピア
ノと それを弾く女の人

御堂 「高坂沙織 あわせてあげるって約束してただろ
彼女に協力してもらったのさ・・・」

青井 「光~~~~」

思わず夕菜は 光抱きついてしまった

・ふたりは 見つめあったまま しばらく 歌を聴いていた・・・
まるで ドラマの 1シーンみたいに・・・

歌が さびの部分に差し掛かると ふたりはどちらともなく キス
を交わした

青井 「光~~~~ありがとう わたし すごくうれしい」

夕菜の目から一筋の涙が・・・流れた

御堂 「夕菜らしくないぞ」

光は 夕菜の涙を 指でそっと拭いた

・青井 「わたしね わたし・・・おもいつきり・・・どうなっ
てもいい・・・」

光は キスで・・・その言葉をさえぎった
そして 夕菜は光に すべてを捧げた・・・

どれくらい 立っただろうか・・・夕菜は 起き上がるといきなり

青井 「えっ??・・・あっ!・・・あああああゝ もし
かして・・・」

青井 「もしかゝゝして・・・高坂さんが いるのにゝ」

御堂 「平気だよ 心配しないで 高坂さんは 歌がおわつたら
俺たちに気をつかって 丘の向こうの売店いったよ」

青井 「なんで・・・君が知っているんだ!!」

御堂 「ごめん 夕菜・・・たぶん こんな展開になつたらよろ
しくとまえてもっていつていたんだ」

青井 「うはゝゝ 光 きみてゝね!!」

青井 「でも いいや・・・それ以上に私はうれしかったもの・
・特大パフェより・・・」

御堂 「それでこそ いつもの 夕菜だ・・・よし、俺たちも 丘
の向こう行こうか 高坂 待ってると思うし」

青井 「はい・・・でもその前に・・・消化 消化 消化・・・」

夕菜は ローソクの火を消していった・・・最初につけた ろう
そくを 大事そうに手に持って帰った

売店

御堂 「またしちゃったかな? ありがとうな」

高坂 「いえいえ お役に立ててうれしかったですよ」

高坂 「貴方が 夕菜ちゃんね 始めまして・・・ちいさくて 可愛
いね」

青井 「はじめまして ありがとうございます まさか 本物の
高坂さんに 会えるなんて」

高坂 「いつも光には 夕菜ちゃんのこと聞いていますよ」

青井 「どんな???」

高坂 「光は いまじゃ トップアイドルなのに それを みじん
とも思わない 女の子がいるって」

高坂 「今回 光から相談受けたとき 飛びついたのは私だし」

青井 「本当にありがとうございます」

高坂 「あと 夕菜ちゃんに もうひとつプレゼントがあるの」

青井 「もうひとつ ???」

高坂は 夕菜に渡した それは サインの入った 高坂のCD二枚
高坂 「一枚は 私の CD そして 一枚は 光にも言っ
て 今さっき 私のパソコンで作ったCDだよ」

青井 「おおおお 私の宝物にします」

御堂 「沙織 ありがとうな・・・ここまでしてくれて」

光は改めて詩織に お礼を言った

高坂 「じゃ わたしは 帰るね・・・光 送ってくれない」

御堂 「すこしだけまっけてくれ マネージャーに連絡して ピア
ノと後片付けの手配だけ済ます」

御堂 「夕菜を 明るイトコまで送ってこないと」

青井 「私は大丈夫だよ 一人で帰れる」「高坂さん がんばつて
ください 応援してます」「あと・・・あのー お願いが」

高坂 「なんですか?」

青井 「光に もう一枚 サイン着いたCDをいただきたいのです
が」

高坂 「おやすいごようですよ」

御堂 「なににつかうの?」

青井 「いや この 高坂さんにいただいた 高坂さんのCDは

友達の志保にあげるの」「いいですか？」

高坂 「いいですよ・・・では また 光に わたしときますね」
青井 「ありがとうございます」

そう言つと 夕菜は走ってキャンプ場に向かった

生澤日記

- - - いなはの日記

- - - 8月×日

- - - ショックです……この数日、部屋からほとんど出ていません。
- - - 食欲もなく、食事もほとんどしていません……
- - - 何があつたのかを日記に書くか迷つたのですが、書くことにしました。

- - - 数日前、偶然見ちゃったんです。

- - - アイが知らない人とロマンチックな場所で
- - - 楽しそうにいちやついてるのを……
- - - 前に友達が見たつて言うのは本当だったんです。

- - - そういえば最近、アイさん いなはに なんか隠している気がする あの人のことかな？……

- - - いなはは、アイだけを想っているのに……
- - - 別れたくない……別れたくないよ
- - - 何とかアイを私に振り向かせたい……

いなはさんへ・・・メール送信

- - - 8月×日

- - - 日記みて オレ、すこしショック受けてます
- - - お体 大丈夫ですか・？
- - - あまり 思いつめないでください
- - - その 彼氏に対して すこし 怒っています

- - いなはさんの 気持ちわかってないなんて

- - 女の子泣かすなんてゆるせません

- - 自分で言うのもおかしいですが 人の気持ちを解ってあげられないなんて とつても悲しいことだとおもいます せつかく 自分を思っている人がいるのにそれにきずかないとは・・ 自分にも 果たしてできるとは 解らないですが・ 解る人になりたいとおもいます

- - このごろ いなはさんの日記が まるで自分が体験しているようにおもいます

- - 年が同じせいかな？

- - オレ いなはさんの日記がたのしみで 絶対いなはさんに元氣になつてもらいたい

- - 何でも言うてください メールでしか応援できないけど

- - 絶対に そんな女の子に負けないください

- - P S オレだったら さりげなく聞きますよ いなはさんなら大丈夫 勘違いだったら もっと 悲しいです 勇気を持って聞いてください

第5章 葉月（はづき）の章（後書き）

第五章お読みいただきありがとうございました

よろしければ評価欄に足跡を残していただければ幸いです

第六章 葉月^{はづき}の章につづく

第6章 長月（ながつき）／菊月（きくづき）の章

飼育小屋の前のベンチで休んでいる志保

青井 「おゝい、志保」

琴葉 「あつ、夕菜」

青井 「やつぱここに居た」

琴葉 「何か用なの？」

青井 「忙しくない？」

琴葉 「大丈夫だよ。ちょうど一段落したところ」

青井 「秋の文化祭だけど…一緒になんかやろうよ。みんなをアッ！と言わすようなこと。どう？」

琴葉 「いいよ。夕菜がなにかするなら付き合うよ」

青井 「いろいろ考えているのだけど、いまいちなんだよね」

琴葉 「難しいよね…みんなが楽しめるイベントは」

青井 「うんうん」「あれ、ここって登下校がよく見えるね」

琴葉 「うんうん、見えるよ。あの人とあの人と一緒に帰っているとか…」

青井 「なんか、情報通になれそうな話題だね」

琴葉 「毎日見ていると解ったりして。いつも待ち合わせして帰る人も居るし、いつの間にか違う人と帰る人も居るし」

青井 「そうなんだ」

琴葉 「誰かが言っていたね…【一緒に帰るのは付き合っている証拠】って」

青井 「まるで家〇婦は見ただね」「そんな見てるだけでなくて、琴葉も彼氏をつくんなよ」琴葉 「こればかりは運命だからね」「そのうちときめくような出会いがあると信じてます。私は…」

青井 「よかったら紹介するよ？志保は勉強できるし、隠れファンも居るみたいだし」

琴葉 「そ、そ、そうなの？知らなかった…」

青井 「私も待ち合わせあるので帰るね。…見た事は人に言わないように！」

琴葉 「はいはい、解ってますよ。がんばってください…」

学校帰り

生澤 「夕菜おそいよ…まあ…まった…よ…」

青井 「ごめんごめん さあ帰ろう帰ろう」

生澤 「何かいいことあったの？」

青井 「ちよつとね。へへへへ」

生澤 「れいみには教えてくれないの？」

青井 「う…ん…」

生澤 「夕菜、何でも話してくれるって言ったでしょ？」

青井 「…あのね、私に新しいお友達ができたの」

生澤 「それって男の人!？」

青井 「うんうん」

生澤 「どんな人??」

青井 「う…ん……」

夕菜はしばらく悩んだ後、話し始めた

青井 「二ヶ月ぐらい前にね…ちよつとしたきっかけがあつて…」

生澤 「うん」

青井 「れいみも知っているとと思うけど、三年の御堂先輩」

生澤 「名前だけは知ってる。よく、クラスで噂になってる人でしょ?」

「確か、ドラマとか出てる人だよな?」「あの人がそうだったんだ…うんうん、れいみはあんまりテレビ見ないから解んなかった」

「それに、男の人って興味ない・し…」 (ハ3ハ)」

青井 Σ (口;) (……絶句)

生澤 「じゃ、今度れいみにも紹介して♪夕菜の友達はれいみの友達♪」

青井 「うんうん」

生澤 「で…その先輩とは、どうなの?」

青井 「まだ始まったばかりの、発展途上ってとこかな?」「何回か、一緒に食事したけなんだよ」

生澤 「そうなんだ〜でもすごいね、タレントさんにご飯か…」

青井 「だから今まで、れいみにも言わなかったの。ごめんね?」

生澤 「れいみの強力なライバル出現か?がんばるぞ!」

青井 Σ(「」)(……絶句)

生澤 「夕菜に彼氏できたのかと思ってたけど、まだ友達か。夕菜に怖くて聞けなかったんだ。夕菜が話してくれて、何か嬉しくなっちゃった」

生澤 「やっぱ夕菜は、れいみの思っていた夕菜だ」

青井 「本当にごめんね」

生澤 「今思うとサマーキャンプの、れいみと一緒にいたとき…そのことで何か悩んでたんじゃないの?」

青井 「うん…それもあったかも」

生澤 「あの時、れいみ悲しかったんだよ…。夕菜とれいみのラブラブタイムだったのに」

青井 「本当にごめん!」

生澤 「じゃ、ちゃんとれいみともラブラブタイムのやり直ししてくれる?」

青井 「うん……ちゃんと、やり直すよ」

生澤 「やった〜」なんか考えよっ」「あ、れいみの家はここを右なので…ちゃんと、計画立てるから、できたら連絡するね」

青井 「うんうん、楽しみに待ってるよ」

生澤 「またね〜」

生澤日記

- - - いなはの日記

- - - 9月×日

- - - ボロボロな夏休みでした。

- - - そんな夏休みも終わって、今日はメール友である涙さんの助

言通りに

- - - さりげなくアイへ訊いてみました。
- - - そうしたら、その人は知り合ったばかりの友達と判明。
- - - 良かったです。それを訊いたとき、思わず涙が溢れそうなくらい嬉しかったです。
- - - でもね、まだ不安なんですよ。なぜなら、その言葉の前に”まだ”と言うのです。
- - - まだ……それってこれから先は……
- - - でも、いなはは負けません。涙さんも応援してくれるし、
- - - アイが私だけを見てくれるように頑張ります。

ラブラブプラン 1

生澤 「夕菜あゝ」

青井 「どうしたの？」

生澤 「こないだ約束したでしょ？ れいみのラブラブプラン、決まったよ」

青井 「それはそれは、お疲れ様」

生澤 「あれから雑誌とか見て検討したの。時間かかったんだからあゝ」

青井 「それは楽しみだ」

生澤 「まずは2人で、アイスクリーム食べに行く」

青井 「おう！！」

生澤 「その後は……秘密」

青井 「Σ（「口」――）な……ナニヲスルツモリデスカ

生澤 「でもね、ぜったい夕菜が驚くと思う」

青井 「私は少しぐらいでは驚きません。キッパリ！！」

生澤 「ぜったい驚くって」

生澤 「で、明日は何か予定はいつてる？」

青井 「別に入ってないよ」

生澤 「じゃ、朝の10時に駅前で待つてるよ」

青井 「10時ね…その前にお願いがあるの」

生澤 「なあに？」

青井 「明日ね、朝9時に携帯で私を起こして…」Σ(□、)

「うん、解ったあ♪」

生澤 「じゃあ、私はちよつと買い物するので先に帰るね！まったね」

青井 「また明日ね」(^^)

いなはさんへ・・・メール送信 From 涙

・・・やったね 日記で いなはさんが元気になったのを見て安心しました

・・・友達だつたんだ 良かったね

・・・俺も恋は あまり経験ないですが 恋は山あり谷ありなんです
すね

・・・俺 ずっと 平坦がいいな・・・ずるいすかね

・・・そんな 不安にならないでください きっと いなはさんの
行動は良い方向に向かいますよ

・・・がんばるだけ 幸せはきます・・・

・・・アイさんだけじゃないよ・・・サイトって小さい窓ですが
俺も見えているって事 ちつとだけ 覚えという

・・・じゃ また メール書きますね

涙さんへ・・・メール送信 From いなは

・・・日記に書いた通り、またまた涙さんのおかげです。

・・・本当に大感謝。

・・・なんか涙さんってどことなくアイに似てる部分があるかも……

・・・それが何なんだかはひみつです(^^)

・・・ところで、しばらく日記では書けないような色々なことを

・・・涙さんと話したいな……ダメかな？

- - - OKでしたら、しばらくは日記の更新をやめて、涙さんとの
- - - メールオンリーに切り替えさせて貰います。

いなはさんへ・・・メール送信 From 涙

- - - 驚いた 今 いなはさんにメール送信したら いきなり受信
メールが・・・

- - - なんか 偶然ってこともあるのですね

- - - 俺がアイさんに似てるってですか？

- - - なんか うれしいような 恥ずかしいような気がします

- - - 俺が2人いたら 俺はいやだぞ（苦笑）

- - - 俺に相談のために日記を休むのですか？

- - - それは どうか？ 俺としては すごくうれしいのですが

- - - やっぱ 俺以外にも いなはさんの日記楽しみにしている人
いると思うと

- - - 俺からは 簡単に 「はい」とは簡単にいえないよ

- - - 大変でなければ 日記は無理がないように 続けてください

- - - 俺以外の いなはさんの日記のファンの人のために

- - - それからでも いいのではないですか？ 俺がいえるのは

こんなことぐらいかな

- - - また メールします

ラブラブプラン 2

青井 「おはようゝれいみ！」

生澤 「あつ！珍しい！夕菜が先に来てるゝ」

青井 「たまにはね……れいみが起こしてくれたから、できたんだ
よ」

生澤 「毎日、起こしてあげてもいいよ」

青井 「あははゝ……」（ハハハ）<

生澤 「じゃあ行きましようか」ハイ！」

れいみは夕菜の前に手を出す

青井 「ん？なに？？」（・・）？

生澤 「手を繋ぐんだよう…ハイ！！」

青井 「はいはい……」（・・）「で、最初にどこに行くの？」

生澤 「今度ね、商店街に新しいアイスクリーム屋ができたんだよ」

」

青井 「そう言えば、チラシが家にも入っていたな」

生澤 「早く行かないといっぱいなんだよ、そのお店」

青井 「それは期待できそうだね！」

生澤 「うんうん」

ラブラブプラン 3

生澤 「おにいさん！私ね、つぶつぶ苺…大盛り！！」「夕菜は何にするの？」

青井 「えつと……お兄さん、聞いていい？」

店員 「はい、何でしょう？」

青井 「ここにあるのは全てアイスクリームですか？」

青井 「アイスマイルでもラクトアイスも嫌だよ、私は」

店員 「大丈夫です、そちらのシャーベット系以外はちゃんと脂肪分があるアイスクリームです」

青井 「おお！なかなか、こだわりありますね」

青井 「でわでわ、私は……このスペシャルプリンってやつがないな。トッピングは、チョコとアーモンド。もちろん大盛りで+店員さんのお気持ちいい」

生澤 「これ、おいしいね」

青井 「私のも、うまうまです」

れいみはこっそり夕菜のアイスをスプーンですくう

青井 「あつ！ずるい！！私もっ！」

と、同じようにれいみのアイスをすくって口に入れた

青井 「で、この後はどこに行くの？」

生澤 「れいみの家」

青井 「えっ、そうなの!？」Σ(「□——」)

生澤 「だって夕菜、私の家に行くと言つと、今日来てくれないと思つたんだもん」

青井 「……………」Σ(「□——」)

生澤 「もう、お家の方で料理もスペシャルイベントも、用意しちゃつた♪」

青井 「聞いてないよ……………」

生澤 「だめえ〜。夕菜あ、いいでしょ〜唐揚げもあるし〜」

青井 「唐揚げ!！」Σ(・□・——)

ラブラブプラン 4

生澤 「よかつたあ。夕菜がちゃんと来てくれて♪」

青井 「ご両親は？」

生澤 「もちろん留守です♪」「またまた旅行中です♪」

青井 「私は完全になれいみの画策にはまったのですね…」

生澤 「策士れいみです!」「さささささ、入って♪」

青井 「おじゃましま〜す」

生澤 「どこ行くの〜、夕菜？」

青井 「れいみのお部屋だよ」

生澤 「ちが〜う!お部屋に料理は持つて行くけど、まずは私が用意したスペシャル見に行くの!！」

青井 「スペシャルつて??」

生澤 「こつちこつち♪」

青井 「こつちつて……………まさか……………」

生澤 「夕菜、ちよつとだけ目をつぶっていて」

青井 「うん…」

生澤 「まだ目をあけちゃだめだよ」

青井 「うん」

目をつぶつた夕菜を、れいみは風呂場に連れて行った

生澤 「もういいお」

青井 「これは……すごい！！なにこれ！！」

生澤 「やっぱ、夕菜驚いた」

広い風呂場一面に色とりどりの花が置いてあり、まるでお花畑のようだった

生澤 「れいみね、昨日ずっとこれ作ってたの」

青井 「すごいれいみ……大変だったでしょ？」

生澤 「うん、お小遣いもいっぱい使っちゃった」「れいみね、前に夕菜と一緒に入ったあのロマンチックなお風呂が忘れられなくて今度はアレよりずっとロマンチックにして、夕菜と入れたかったの」

青井 「それはそれで別として……これ、本当にすごいよ」

生澤 「気に入ってもらえた？」

青井 「うんうん！！」

生澤 「今からお湯を張って最後の仕上げするから、お部屋に行こう？」

ラブラブプラン 5

青井 「こないだより、多目の唐揚げ」

生澤 「前は少し足りなかったと思って、今日はもっと作つときました」

青井 「ありがたいね」

生澤 「漬け込み時間も長くしたので、もっと美味しいよ」

青井 「本当だ！しっかり中まで味がしみこんでる！」

生澤 「もう、夕菜と知り合ってから半年になるんだねえ」

青井 「そうだね」

生澤 「夕菜は私たちのグループのこと、どう思う？」

青井 「仲良しグループの事？」

生澤 「うん。なんか、サマーキャンプ終わってから団結力でできたでしょ？」

青井 「れいみはどう思う？」

生澤 「なんかさ…変なのばかり……」

青井 「それを言っちゃあ…」Σ（「口——」）

生澤 「すぐ俺がリーダーだって言う委員長。がんばり屋の副委員長
長の夕陽ちゃん。理論家の健吾君。喧嘩早い康介君。勉強家の志保
ちゃん。それに、いつ何をしでかすかわかんない夕菜。」

青井 「もしもし？貴方が抜けてますが？」（「——」）

生澤 「うんうん。夕菜とラブラブ中を言えない、れいみ姫」

生澤 「でも、みんないい人だね」

青井 「そこまで言っていていい人で締めるのも、どうかと思う…」Σ
（「口；」）

生澤 「あっ！もうお風呂が沸いたかもしれない…いこ！夕菜」

青井 「うんうん」

ラブラブプラン 6

生澤 「夕菜、ちょっとだけそこで待っててね」

そう言うといれいみは服を脱いで、浴室に一人が入っていった

青井 「……………」

しばらくして

生澤 「いいおゝ入ってきて」

青井は服を脱ぐと浴室に入っていた。お湯が張られたせいか、浴室の中はさつきより花香りが強く感じられた

生澤 「夕菜、お風呂のお湯に手を入れてみて」

青井 「あっ！？なにになになに、これ？？」

生澤 「すごいでしょ」

青井 「うんうん」

浴槽のお湯は、まるでゼリーの様になっていた

生澤 「こないだネットで見つけたんだ。それで、夕菜と入ろうと
速攻で買いました」

青井 「すごいね、これ……」

生澤 「ささささ、入ろうよ」

青井 「うん」

夕菜は恐る恐る浴槽に足をつけて中に入った

青井 「なんか本当にゼリーみたいだ…なんなの、これ!？」

生澤 「入浴剤だよ」

青井 「入浴剤か?…でも、こんなの初めて」

生澤 「れいみもだよ」

青井 「なんか私たち…ゼリーに浮いているフルーツ?」

生澤 「だね」

青井 「じゃ、私は桃で…れいみはスイカ」

生澤 「スイカ…いやや…そんなにれいみは丸くも赤くも無いよお

!夕菜ずるゝい」

青井 「はははははは」

生澤 「ゆうゝなゝそっちに居ないで、こっちに来てゝ」

青井 「うん」

夕菜はれいみに寄りかかるように前に座った

生澤 「ラブラブだゝゝ」

夕菜の背中にはれいみの胸が当たっている感触がする

青井 「こないだより、ロマンチックだね」

生澤 「れいみ頑張ったかいありました」

青井 「おつかれさま」

生澤 「ちゃんとヒエヒエの苺ミルクもありますよ」

と言つと、たつぷりと苺ミルクが入ったグラスを夕菜に渡した

青井 「おおゝヒエヒエ苺ミルクだ」

生澤 「いつも購買で夕菜が買っているので用意しちゃった」

青井 「あれ?グラス一個だけ?悪いね、私のためにだけ」

生澤 「なに言ってるの。ほら…」

れいみは夕菜が飲もうとしているグラスに二本のストローを入れた

生澤 「いっしょいっしょ」

生澤 「ねえ、夕菜……」

青井 「なに??」

生澤 「れいみね、なんか……………やっぱいいや」

青井 「今度はれいみが隠し事?」

生澤 「うんとね…やっぱ話す」

生澤 「れいみにもね、気になる存在の人ができたみたいなの」

青井 「おお!それは、おめでとう!!」

生澤 「なんかその人、夕菜に似ているの」

青井 「私に…?」

生澤 「うんうん…なんか、その人と話していると、まるで夕菜と話してるように感じるんだ」

青井 「そうなんだ…その人も大切にしてね」

生澤 「うんうん」

生澤 「夕菜にも新しい友達できたし、れいみにもできたし…一緒にだっ」

青井 「うんうん」

生澤 「でもね、夕菜…」

青井 「なに??」

生澤 「夕菜は夕菜だからね。夕菜といっしよのときは、れいみは夕菜のことだけ見ているし、考えてるし…だから、夕菜もれいみと居るときは、れいみの事だけ見ててね」

青井 「うん」

生澤 「約束だよ絶対」

と言つと、れいみは夕菜のことを後ろから抱きしめた

青井 「れいみ……」

生澤 「夕菜…だいすき」

夕菜はその言葉を聞くと振り向いて、れいみの唇に少し長めのキスをした…

涙さんへ・・・メール送信 From いなは

・・・実はいなはの日記サイト、最近ほとんどカウンターが

- - - 上がってないんです。そんなこともあり、ちょっとお休みに
してしまいました（^^）
- - - だから気にしないでね。
- - - そうそう、アイとはあれからラブラブです。
- - - 今日も帰りに二人でアイスクリーム食べに行ったんだよ。
- - - 涙さんは、どんなアイスが好きですか？
- - - また明日、メールしますね

第6章 長月（ながつき）／菊月（きくづき） の章（後書き）

第6章までお読みくださりありがとうございます

- - - これだけは 譲れません

- - - なんて アイスのことでメールがいつぱいに・・・Σ(

口・)

- - - また メールします

涙さんへ・・・メール送信 From いなは

- - - 今、いなはは毎日がつっても充実して楽しい日々の中で暮ら
しています。(^^)

- - - 学校ではアイとの楽しい時間。

- - - 帰ってきたら涙君のメールを見て、返信を考えたりする時間。

- - - ああつ、とっても幸せです。

- - - そうそう、可笑しいんですよ。

- - - 涙さんの メール読んで

- - - 思わず笑ってしまいました。

- - - 前に アイさんと アイスクリーム食べたと書きましたよね

- - - そしたら アイさんが言ってたこととおんなじ風に

- - - 涙君 書いたんだもの (^^*)

- - - そうそう、今度チャットしてみませんか？

- - - 一度、リアルで涙君と話がしてみたいです。

- - - いなはの お・ね・が・い。

いなはさんへ・・・メール送信 From 涙

- - - チャットですか？

- - - チャットは勘弁して

- - - なんて 言うのも失礼だし・・・

- - - 俺 いなはさんと違って 多分 メール書くのも考えて考えて

- - - 書いているので チャットだと しょうも無いこと書くかも

しれないです

- - - でも 俺との時間が いなはさんの元気が出る時間と思えて

- - - いただけるのは とても光栄です

・
- - - 多分 お互い学生なので時間帯は問題ないと思いますが・・・
- - - アイさんと 俺が同じ話をつてΣ(。O。一一)
- - - 俺以外にも アイスマニアがいたことのほうが 驚きです
- - - よろしければ 次回のメールでチャット場所アドレス
- - - 教えてくれるとありがたいです
- - - 会話ついていく練習しないと いけないと思った涙です B
y コピー いなは
- - - でわでわ 今回はチャットか ハアアアア ↑ため息のつもり
!! またね

体調不良

学校中がお祭り騒ぎに浮かれている中、夕陽だけはその盛り上がり
に付いて行けなかった。

柊 「コスプレ喫茶、かあ…」

青井 「お、夕陽。何だまた委員長の雑用か？ 委員長は、なんで女
の子に物事簡単に頼むのかな。一発ガツツンといってやんないと、
だめっぽ」

柊 「夕菜ちゃん。雑用って言うか、文化祭の実行委員だよ」

青井 「でも何だか、むっちゃ顔色わるいよ？」

柊 「心配しないで。ただ少し気分が悪いだけだから。」

青井 「保健室いこうよ！いま夕陽に体調わるくされたら、私の楽し
みの文化祭が…絶対に保健室に連れて行く！…あつ、なんか私も具
合悪くなってきた…嘘」

柊 「実行委員で張り切りすぎちゃったのよ。ホントにそんな大
げさにしないでいいからさあ。夕菜ちゃんって、案外心配性ね」

保健室

ハアハアハア…夕菜は勢いよく保健室の扉を開けて中に入った。

青井 「先生、お願いします〜！」

校医「あら、青井さん。まーた居眠りに来たの？」

青井「違いますよ。負傷兵を一名、輸送してきました！」

校医「負傷兵って……まあいいわ。とにかくここに座って、クラスと名前を教えてちょうだい」

柊「1年H組、柊 夕陽です」

校医「1-Hで、ひい……らぎ……ゆうひ、と」

校医は来室記録に夕陽の名を記すと、手早く健康診断の記録の中から彼女のページを探し当てた。後ろからコソツと夕菜が覗き見……

校医「青井さん、覗いちゃダメっていつも言ってるでしょ！」

青井「それって、全校生徒の〇〇がいくつかとか載っている、わたしにとつて、ひじょーに興味深い資料ですよね？」

校医「そうです。だから生徒には一切見せられません」

青井「一ページだけでもダメですか？」

校医「ダメです！……それより柊さん、ずいぶん顔色が悪いわね。いつごろから？」

柊「この一週間ぐらいです。文化祭の実行委員で頑張りすぎちゃったみたいで……」

青井「うちの委員長が夕陽に雑用ばかりやらせたからです！」

校医「青井さん……そのベッドで寝ていいから、少し静かにしてくれる？」

青井「はー……い」

夕菜は怒られたことも分かってないとみえて、奥に並んだベッドに横になり校医と夕陽の会話を聞いていた。

校医「はい、体温計。……少し熱があるようね。健康診断では貧血気味とあるけど、他に変わったことはあるかしら？」

柊「少し、身体がだるい感じがあります」

校医「風邪かしらねえ……。担任の先生には私の方から伝えておくから、しばらく横になって楽になったら今日は早退するといいわね」

柊「先生、青井さんは……」

青井「zzzzzzzzzz」

夕菜はいつの間にか寝てしまったようだ。

校医「やっぱり寝ちゃったみたいね。いつものことだから、そのままにしておきましょう。柊さんも一人では心配だし、帰るときは青井さんを起こして一緒に帰りなさい」

柊「わかりました。ありがとうございます」

夕陽は夕菜の隣のベッドに入ると目を閉じた。

柊「夕菜ちゃん起きて。……夕菜ちゃん、帰ろうよ」

青井「……？おはよう、夕陽」

柊「噂には聞いてたけど、本当にいつも保健室で寝てるんだね」

青井「何かここのって、気持ちいいんだよね」。そのために保健委員になっただなもの」

夕菜は目をゴシゴシと擦りながら起き上がると、アクビをしながら大きく伸びをした。

青井「体調はどう？もう大丈夫なの？」

柊「うん、少し寝たらずいぶん楽になったよ。先生が、一緒に早

退していいから夕菜ちゃんに送ってもらって帰るようになって」

青井「おおお！ラッキー！！」

柊「ごめんね。せっかく楽しみにしてた文化祭なのに……」

青井「それは構わないよ。文化祭は来年もあるし、見たいのはもう見ちゃったし。それより学校公認で帰れるのは嬉しい」

柊「夕菜ちゃん、皆が心配するといけないから、今日のことは皆や。輝くんには内緒にしておいてね」

青井「うんうん、とく……に！輝にはでしょ！」

柊「……！！」

青井「はははは……！このごろ夕陽と話していると度々、輝の話が出てくるんだもの。いくら鈍感な夕菜でも解るよ」

顔を真っ赤にした夕陽は「いや……あの……」と口ごもりながら、まだ言いたそうにしている夕菜を急ぎ立てて保健室を後にした。

10 - 7 (生澤ストーリー) 涙さんへ……メール送信 Fr

o m いなは

- - チャットのアドレスです。

- - 待ち合わせは11月×日の20時でいいですか？

- - 都合が悪いようでしたら、メールください。

- - なんだか、今からドキドキ

- - 楽しいチャットをしようね。

第7章 神無月（かななづき）の章（後書き）

第7章までお読みいただきありがとうございます
お手数ですが 評価をいただけると幸いです

第8章 霜月（しもつき）の章

相変わらず体調を崩したままの夕陽。口止めされているとは言え、気が気でない夕菜。

柊 「……1・2・3…おかしい、よね…いくらなんでも遅れすぎ…もしかして…」

青井「あれ、夕陽。どうしたの？もしかして、まだ体調よくないんじゃない？」

柊 「あ、夕菜ちゃん…」

青井「なんか変だよ…夕陽、なにかの病気じゃないの？このごろ授業中も元気ないし、クラブ活動でも夕陽の姿は見かけないし。あれからずっとでしょ？絶対変だよ！」

柊 「ホントに、たいしたことないんだって。大丈夫だよお」

青井「なんで！こんなに心配してるのに…なんか私に隠してない？」

柊 「隠してないよお…」

青井「いんや、隠してる…私には解る！夕陽、嘘つくとき鼻がピクピクするもの。私に言えないことなの？どうしても嫌というならしょうがないけど…一人で考え込んでもしかたないよ？」

柊 「うん…そうだね、わかった。本当のことを話すわ。でも、お願いだから誰にも言わないでね…」

青井「やっぱり何かあったんだ？」

夕陽は意を決してサマーキャンプでの一部始終を夕菜に明かした。

回想

柊 「あつ……輝くん！？…ちよつと！や……っ！！」

緑川「あつ……ごめんっ！つい…」

柊 「……」

緑川「……」

慌てて離れる輝。無言のまま気まずい雰囲気が漂う。輝が大きく深呼吸すると、ピクツ…と夕陽は震えた。

緑川「えっと…怖がらせるつもりはなかったんだ。ごめん。……あ、あのさ」

緑川「俺と…付き合ってくれないかな」

柊「……………え……………えええっ!？」

緑川「あー、そうだよな、俺なんかそんなこと言われても困るよな。ごめん、忘れて」

柊「待つて!違うの!！」

緑川「違うって…？」

柊「あの…えっと……………びっくりして。…でも、困らない、から…」
緑川「……………は？」

聞き返されて真っ赤になる夕陽。

柊「さ、最初はね、副委員長なんて押し付けられて、いやだなーって思ってたの」「いつも面倒な雑用ばかり私がしてて、委員長はふらふら遊び呆けてるし」「でもね、そう思って腹を立てながら輝くんのこと見てたら…違うなって、わかったの」「輝くんって、いつも教室の中を走り回ったりすぐ廊下に出たりしてるけど、それって遊んでるだけじゃないでしょ？」

「私がこけそうになった時はさり気なく手を引っ張って助けてくれたし、重い教材を運ばされてる時はふざけた振りして持ってくれた」「だから…えっと……………買出しの時、名前で呼んでいいって言ってくれて、すごく嬉しかったの……………だから……………」

緑川「ストップ!…そこからは、俺のセリフ」「柊はいつも、どんな大変な用事を任せても完璧にこなすし、しかも俺のフォローまでしてくれてて、すげーなって思ってたよ」

「誰にでも分け隔てなく接するし、でも愛想がいいだけの俺みたいのじゃなくて、ちゃんと締めるところは締めるし」

「それから……………俺が助けるのは、柊だけだから」

柊「え…それって……………」

緑川「柊はいつもニコニコ笑ってる。俺は、笑ってる柊が好きだから、いつも笑っていてよ」

柊「……………はい」

夕陽はそう答えると、今日一番の笑顔を見せた。

緑川「……………えーっと、柊…キス、していいかな……………」

柊「……………うん……………あ、あの、私のことも、名前で呼んで？」

緑川「好きだよ……………夕陽」

後編

青井「それでそれでっ！？もしかして、そのまま……………」

柊「うん……………隠してたのは、照れくさかったから……………。内緒にして心配かけちゃってごめん」

青井「エエエエエ……………本当なのそれ！？二人を見ていていい感じには思えてたけど、そこまでだったとは……………」

真っ赤になりうつむく夕陽

青井「で、それから生理がきてないってことなの？」

柊「……………うん……………もともと生理不順だし、いつも通り遅れてるだけだと思ってたんだけど……………」

青井「じゃあさ、とりあえずは薬局に検査薬買いに行こうよ」

柊「ええっ！？買いに行くの？……………恥ずかしいよ……………」

青井「うんうん！だって早い方が……………あれ？」

柊「ん？どうしたの？」

青井「いや、妊娠かもと聞いて気が動転していたけど、もしかしてお腹の赤ちゃんのパパって、委員長なんだ……………」

柊「あたりまえでしょ……………」

青井「あの委員長がねえ……………きゃははははははは！！」

柊「いきなり笑い出して、どうしたの、夕菜ちゃん？」

青井「だって……………ははははは！お腹の赤ちゃんの第一声が『ママ……………僕、委員長になるからね』と言う姿を思い浮かべてしまった……………あはははははは」

柊 「ぶっ!!」

青井 「あっ！夕陽の笑った顔、久し振りに見た」

柊 「うん、私も久し振りに笑った気がする」

青井 「おっと、こんなことしている場合ではない！委員長ダッシュで薬局行くぞ」

柊 「わかった！わかったからそんなに腕を引つ張らないでー！あいたたたあ」

商店街買い物

青井 「薬局は〜っと。あつた！あそこだ！おじさ〜ん!!」

柊 「ちよつと、夕菜ちゃん！そんな大声でっ!!」

青井 「なに言ってるのよ。お店の人に聞くのが手っ取り早いんだから！それに、上手く値切ってる〜」

柊 「…値切れないと思う」

青井 「さあさあ、早く買って買って！それからそのコンビニでトイレを借りて…」

柊 「もしかして夕菜ちゃん、楽しんでない？」

青井 「いや、そんな、楽しんでなんか…ちよつとしか」

柊 「…やつぱり。とにかく！買うから。でも、コンビニはさすがに…」

青井 「バレタか。じゃあじゃあ、ファミレスで!」

柊 「コンビニもファミレスも却下!…家に帰ってから検査するよ」

青井 「うん、わかった。じゃあ結果がどうだったか連絡ちょうだいね」

柊 「……うん」

柊 「これで…1分待って、判定窓に青い線が出なければ陰性、出れば……………」

柊 「もしもし。夕菜ちゃん？結果ね、陽性だった……………」

病院

柊 「夕菜ちゃんごめんね、面倒なことに巻き込んだじゃって」

青井 「何のこれしき、乗りかかった船だし友達のためだ！」

柊 「ありがとうございます…夕菜ちゃんが付いて来てくれて、本当に心強いよ」

青井 「ホントに間違いないんだよね？陽性って？」

柊 「うん……説明書に書いてあった通り、はつきり線が出た……」

青井 「そっか…相手が委員長だったのも間違いないんだよね？」

柊 「当たり前でしょ！んもう、夕菜ちゃんったら」

青井 「残念だな…夕陽の相手だったらもっと、背が高くて、足が長くて、ハンサムで、頭がよくて…」

柊 「それは夕菜ちゃんの理想でしょ」

看護婦 「柊さん」

柊 「はい！…じゃあ、行ってくるね」

青井 「健闘を祈る！」

待合室でソワソワしている夕菜

青井 「まだかな…夕陽の赤ちゃん、いつ産まれるんだろう」「名前は、そうだな。夕陽の赤ちゃんだから夕子とか…男の子だったら…いや待てよ、画数の問題もあるな」「大きくなったら、男の子ならプロ野球選手がいいな。日本中で美味しいものを食べられるし。女の子だったら…」

「って、私が考えることじゃなかった……」

診察室の扉が開き、夕陽が出てきた。

柊 「ありがとうございます」

青井 「夕陽！」

柊 「ん……4ヶ月目だった」

青井 「そうか…。それで、夕陽はどうするの？」

柊 「うん……昨日ね、検査薬で陽性って反応が出て考えたの」

青井 「うんうん」

柊 「もちろん私の両親とも話し合わなきゃいけないけど、私……輝くんのこと好きだし、好きな人の赤ちゃんなら……産んで、育てたくなって」

青井 「……………」

柊 「それにね、お医者様が、もう4ヶ月目に入ってるから中絶は危険だって言ってた」

青井 「……………」

柊 「たぶん学校も……退学しなきゃいけないだろうなって、思う」

青井 「……………」

柊 「ねえ、私が退学しても、友達でいてくれる？」

青井 「そんなの当たり前だよ！」

柊 「うふふ。ありがと」 はあく、ハッキリしたらお腹すいちゃった。パフェでも食べに行こっか？今日のお礼に奢っちゃうよ」

チャット

涙 > はじめまして なんが緊張するな

いなは > リラックス、リラックス……なんって、実はいなはも緊張しまくってます（^^）

涙 > メールと日記では わかっているつもりなんですけど、すぐ返事かえってくるなんて変な感じします

いなは > やっぱメールと違って、リアルな感じがいいですよ

涙 > あらためて 自己紹介しますね 俺 高校に通う一年生

男 趣味は料理とパソコンかな

涙 > 住んでいるのは 中部地方とだけいつとくかな

いなは > いなはも高校1年生。中部地方で。。。線内に住んでいます。意外と近くなのですね（^^）

涙 > もしかすると 会ってるかもね

いなは > そうだったなら素敵ですね。涙君は部活とかで忙しいんで

すか？

涙 > いろいろと 考えてはいたのだけど やらずじまいで お
わっちゃったよ

涙 > いなはさんは どうなの なんかスポーツとか部活で活
躍しているのですか？

いなは > なんか いなはも 部活しなくて おわっちゃったな
アイさんも部活してないみたいなので

涙 > それから 彼とはどうなの？

いなは > うん アイさんとは うまくいつているよ

いなは > 涙君の アドバイスのおかげで

涙 > それはよかった

いなは < いなはね 思っんだ 人には言えない秘密って 誰もが
持っているんだよね 涙君も持っていますか

涙 < 秘密か なんだろ う 俺の秘密って？

いなは < いつかは 私も涙君になら 私の秘密はなしちゃいそ
うだな

涙 < 秘密は大事にしまっておいてください W

いなは < なんか 二股かけているように聞こえるけど このこ

ろ いなは 涙君のことがいろいろと 知りたいと思う自分も居るの
涙 < 俺のことですか？ 話せる範囲ならいくらでも 教え

るよ W

いなは > きょうは 楽しかった また 来週同じ時間にここでチ
ヤットしてくれる？

涙 > もちろん 今日は ひたしぶりだったので なんか 緊

張して ちぐはぐなチャットでごめんね

いなは > ううん いなはは平気 涙君 これからもよろしくね

いなは < またね

いなははチャット部屋から退室しました（2005 - 11 - XX -
XX : XX）

教室

翌朝、大股で教室に入ってきた夕菜は、誰にも挨拶すらせず委員長のもとに駆け寄った。

青井「委員長、ちよつと!!」

緑川「なに？」

青井「いいからちよつと、来なさい！」

夕菜のあまりの大声に、その場にいた全員が一斉に二人を見た。

生徒「おお？夕菜と委員長の最終戦争勃発か？」

生徒「夕菜、あまり輝をいじめちゃだめだぞ」

青井「君たちは関係ないでしょ！ちよつと黙っていてよ！」

生徒「うっ…夕菜が本気で怒った顔、初めて見た…こええ」

青井「委員長、こっちにきて……」

と言うと夕菜は輝の手をグイッと強く引き、そのまま体育館裏まで連れて行った。

体育館裏

緑川「なんだよ、こんなトコに呼び出して」

青井「決まってるでしょ、夕陽のことだよ」

緑川「夕陽がどうかしたのか？」

青井「…退学、するかもしれない」

緑川「え……」

青井「夕陽から、二人の関係は聞いたよ」

緑川「まあ、別に隠すことでもないしな。でもそれと退学がどう関係あんだよ」

青井「思った通り、夕陽は君に伝えてないんだね……」

緑川「何だよ！夕陽、どうかしたのか!？」

青井「……妊娠した」

緑川「……え！？冗談…だろ……」

青井「冗談でこんなこと言えるかつ！」

緑川「本当、なのか…でも…まさか、そんな……」

青井「最近の夕陽を見ておかしいと思わなかったの！？一人で悩んで苦しんで…」

緑川「確かに、元気がないとは思ってた。でも、いつも笑ってはぐらかされて…」

青井「昨日、病院に付き添ったけど…何もかも吹っ切れたようだったよ？」

緑川「あいつ……！！」

今にも走り出そうとする輝の腕を掴み、夕菜は言った。

青井「私、夕陽の友達だから！何があっても大事な友達だから！！」

緑川「…教えてくれてありがとうな。それから…夕陽に気付いてくれたこと感謝する」

そう言う輝は理事長室のある特殊校舎に向かって走っていった。

退学届

夕陽は退学届けを手にし、理事長室に入ったものの誰もいない。

柊「まったくもう…ほんとに理事長も秘書さんも、肝心なときにはいないのよねえ。のんきな学校だわ」

柊「しょうがないなあ。定番の『職員室で大騒ぎ』でもやりますかあ」

柊「しかし昨日の夜は面白かったなあ。昼メロみたいにお母さんは倒れちゃうし、お父さんは「相手は誰だ！」なんて怒り出すし」
すっかり開き直った様子の夕陽。妊娠という現実を受け入れたことにより、肝が据わったのだろう。

くすくすと笑いながら理事長室を後にし、職員室へ向かった。

柊「失礼しまーす。1-Hの柊ですが、先生は…」

担任「お、柊か。また委員長の使いつ走りか？」

柊「違いますよお。今日は私用です」

担任「珍しいな。で、どうした？」

柊「退学届けを出しに来ました」

ずっと握り締めていた退学届けを担任に渡そうとした。

そこにバタバタツつと足音が近付き、輝が職員室に入ってきた。
緑川「夕陽！結婚しよう！！」

柊「えっ！？…ちょっと輝くん、いきなりどうしたのよ！？」

緑川「夕陽とお腹の子は、俺が守るから！」

ざわめく室内。教師はもちろん、居合わせた生徒たちも驚いてこちらを凝視している。

担任「おい、何事だ？…とにかくここじゃ話もできなさそうだな。

二人とも進路指導室に來い」

柊（あちゃー…ホントに大騒ぎになっちゃったよー）

そのころ教室では

「委員長が戻ってこないけど、夕菜が殴り飛ばしたのか？」

青井「そんなことしてないよ」

「でも、あの怒り方は尋常じゃなかったしな」

青井「うるさいなあ…」

教室に駆け込む生徒。

「一大事！夕陽ちゃんが退学して委員長が子供って！」

「はあ？何わけのわかんないこと言ってるの？」

青井「二人はどこ？」

「…先生が進路指導室って言ってたけど」

青井「わかった」

夕菜は立ち上がり、進路指導室に向かった。何かを察したのか、れいみ達グループの面々も後に続いた。

進路指導室にて

担任「何か、わけがありそうだな。言ってみなさい」

緑川「……………」

柊「……………」

担任「二人とも黙ってちゃわからないじゃないか。…柊の退学届けと関係あるのか？」

緑川「……………」

柊「……………」

担任「しょうがないな。先生は飲み物を買ってくるから、その間に二人で話し合いなさい」

そう言っていると担任は出て行つた。

柊「…夕菜ちゃんに聞いたのね？」

緑川「ああ……………」

柊「そっか」

緑川「夕陽…さっきの言葉に嘘はないから」

柊「輝くん…」

緑川「俺はまだ頼りないかもしれないけど、夕陽の笑顔を守るためなら…何を失つてもいい」

緑川「俺も退学して働くから…俺と、その子と、3人で一緒に生きよう」

柊「ダメだよ、そんな簡単に決めちゃ」

緑川「簡単じゃないよ！俺にとって一番大事なのは夕陽だから」

柊「輝くん、優しいね…」

緑川「ご両親には、もう言つたのか？」

柊「うん、昨日ね。お母さんは泣き出すし、お父さんは怒るしで大変だったよ」

緑川「俺、挨拶に行くから」

柊「無理はしないで？私は大丈夫だから…」

緑川「夕陽が傍で笑つててくれれば、俺は生きていける」

柊「本当に…いいの……………」

緑川「ああ。だから…ずっと一緒にいよう」

柊「……………うん」

輝はそつと夕陽の肩を抱くと、頬に口付けた。

その時、友人たちと担任が進路指導室に入ってきた。

担任「大体の話は、青井から聞いた。だが二人揃つてすぐ退学とは性急過ぎないか？」

青井「夕陽、ごめん。いろいろ喋っちゃって…」

柊「ううん、どうせ話さなきゃいけないことだもん」

「先生、二人が退学せずに済む方法ありませんか!？」

担任「難しいな……こればかりは、先生だけでは判断できない」

担任「職員会議にかけて…緑川と柊は当分の間、停学になるだろう」

柊「…はい」

緑川「覚悟の上です」

担任「前例のないことだから、どうなるか……それに職員室の一件で、既に噂も広まってるらしい」

担任「それぞれのご両親とも話し合う必要がある」

緑川「はい」

担任「とにかく今日は二人とも早退しなさい。この様子じゃ、授業にならんだろう」

柊「ご迷惑かけて…申し訳ありません」

担任「学校側から連絡があるまで自宅謹慎だ。いいな」

「私たちも、二人が退学せずに済むように考えてみるね」

「輝と夕陽ちゃんがいなくなったら、うちのクラスはボロボロになるからな」

「いや、委員長はいなくても……」

緑川「ひでーな、お前ら」(苦笑)

テラス

夕菜達が テラスで昼食を食べていると テレビがおいてある前あたりが 騒がしい

生徒A うそー わたしもう いきていけないー

生徒B あんたにや関係ないでしょ 会った事もないのに

生徒A そんなーずっと ファンだったのに

生徒B でもさ 御堂さんも やるねー

生徒 けっこう この番組の信憑性も高いしね

生澤 夕菜いつてみよゝなんか テレビで御堂先輩のスキャンダルが発覚したみたいだよ

青井は興味がすごくあったが 丸で興味の無いそぶりをれいみにした
青井 そうなんだ・・・

生澤 いこうよ 夕菜

夕菜はれいみに 腕をひつぱられ テレビの周りの生徒の輪にはいなかった

レポーター 先日 人気タレントで俳優の 御堂光「18」さんに 恋人が発覚しました 御堂光さんは 現在放送中のテレビドラマに「ともしびの愛」主役として出演中の 人気タレントです お相手は 同じくドラマに出演中のヒロイン 山見聖歌「16」です 二人はロケ場所である さくらの撮影所近くの ホテルでの密会を 雑誌ズームの記者にスクープされ 発覚となりました 現在 二人の事務所からは なんのコメントも発表されてません もし これが本当なら 年内に大型学生カップルの誕生かと芸能界はわいて います

生澤 ヘエエゝ でもさ 夕菜は信じて無いんでしょ?? いまり ニュース

青井 なんて・・・??

生澤 いや あれから 何度か夕菜と御堂先輩が 話しているの みちゃったんだよ

青井 あなたねゝ

生澤 私もレポーターの素質あるかな?? でもだれにもいつてないよ

青井 芸能界はわかんないものね いろいろと 噂が立ちやすいからね

夕菜の返事はしているがすこし 動揺しているようだ
青井 そのうち あいつから連絡あると思うし・・・

生澤 元気を出してね 夕菜・・・わたしがいるからさ

青井 ありがとう れいみ・・・

青井 うち ちょっと 気分すぐれないので 保健室いつてくる
う言つと 夕菜は 一人で保健室に向かった

保健室

光の携帯に電話をかける夕菜

青井 でないな きっと 取材の電話で警戒しているのかな？

御堂 もしもし

青井 あっ 光でくれたんだ

御堂 夕菜 やっぱ 電話かけてきたんだ

青井 もちろんですよ あんな報道見せられたら 気になって仕方ないでしょ

御堂 だと 思ったよ

青井 率直にきくけど アレ・・・どういうこと？

御堂 デマだよ・・・ついさ 彼女の相談うけたら あんな事になるなんて

御堂 いま 事務所もてんでこまい・・・もう 困っちゃうんだよな

青井 そうか・・・でも少し安心した

青井 本当に大変そうだね

人の声 「・・・誰？・・・いま・・・ですよ」

電話の向こうで人の話し声がある

青井 「いま どこに居るの？」

御堂 「マネージャーへが用意してくれたホテルにいるよ」

人の声 「・・・はやく・・・」

御堂 「マネージャー いま 終わりますから 先方の方に連絡つけといてください」

人の声 「・・・マネージャー・・・」

御堂 「じゃ 夕菜・・・マネージャー待っているから 切るね」

青井 「うんうん 大変ですががんばってください」

青井 「クリスマスは 会えるんだよね たのしみなんだ 私は」

御堂 「うんうん いまの現状では どうなるか わかんないけど・
・・」

御堂 「なるべく 開くことを願っててください」

青井 「うんうん・・・じゃ 忙しそうなので切るね・・・悪かつ
たね電話して」

御堂 「じゃー!!」

れいみのチャット

いなはは 涙君のことが興味 しんしんで仕方ない

- - - いなは >こんばんは。 昨日、面白いサイト見つけたんです。
これが結構当たるんですよ。

まず、性格判定、やってみてもらえますか？

- - - いなは >ちなみに、いなはの結果はこれです

- - - いなは >http://www.oxox.xx.jp/s

ei.cgi?134\$ddru1332542387

- - - 涙 >ちよつとやってみますね。

- - - ・ ・ ・

- - - 涙 >僕の結果です。

- - - いなは >http://www.oxox.xx.jp/s

ei.cgi?4767\$dwfer253754

- - - いなは >涙君は、犬型で作家向きだつて。

- - - いなは >人の悩みを聞いたりするのが得意ってところは、
もうバッチリ当たっていますね。

- - - 涙 >どうかな 他人が知るほどに 自分は自分の事し
らないもんだし

- - - >あたっているといえは あたっているのかな？

- - - いなは >ちよつと冷たい部分もある現実主義ってそこは外

れだよな？

- - - 涙 >俺 結構クールって 思っているんだけどな

- - - いなは >女の子にモテモテなわりに女の子が苦手って本当
ですか？

- - - 涙 >もてもて・・・だったらうれしいけど・・・あいに
く居ないです

- - - >いま ここに チャットして無いよ・・・そんなに
もてもてだったら

- - - いなは >まあ、全部当たっていたら、このサイト、怖すぎ
ですからね（w

- - - 涙 >たしかに・・・運命は切り開く物と信じていますし
- - - いなは >あつ、理想な恋人の型はウサギ型って……いなは
はウサギ型だから、ぴったりですね。

- - - 涙 >うは いなはさんの理想の男性が 俺かよ・・・
まいったな

- - - いなは >はつは涙君、照れてますね。

- - - 涙 >うさぎは 寂しがり屋さんか・・・俺狼だったり
して・・・

- - - 涙 >あとは ご想像に・・・マテ！！

- - - いなは >今日はこの判定サイトのおかげで、結構涙君の事
が分かって嬉しかったです。

- - - 涙 >うんうん 俺も楽しかったよ

- - - 涙 >じゃ また 来週の同じ時間によろしく

- - - いなは >はい お待ちしています まったね

- - - 涙 >また よろしくお願いします

- - - いなははチャット部屋から退室しました（2000

5 - 1 1 - X X - X X : X X)

第8章 霜月（しもつき） の章（後書き）

8章までご覧頂きありがとうございました

9章もよろしく願っています

第9章 師走（しわす）／極月（ごくげつ）の章

破局

生澤 なあに 夕菜？？

青井 ごめんね こんな所に来てもらって

夕菜は屋上に れいみに来てもらった

生澤 いいよ 夕菜が呼んでいるなら れいみどこでも行くよ

青井 あのね れいみ 聞いてほしいことあるんだ

生澤 なになに またまた 今度は夕菜のラブラブ計画？

青井 ちがうの・・・れいみ

青井 私たち 普通のお友達にもどろう

生澤 えっ？・・・それどういうこと？

青井 うん・・・もう れいみと ラブラブごっこできない・・・

生澤 なんて？

青井 私たち このままじゃ いけないと思う

生澤 私のこと嫌いになったの？

青井 そんなことないよ・・・ただ

生澤 ふたりの約束どうしちゃったの？

生澤 そんなの 夕菜 おかしいよ

生澤 彼氏は彼氏 私たちは私たちとお互い約束したでしょ？

生澤 れいみね・・・夕菜の事 だれにも取られたくないと思って

がんばったんだよ

生澤 れいみね・・・夕菜に彼氏ができた時だって 我慢したんだよ

生澤 れいみね・・・ほんとうは みんなに 夕菜との事を 話した

くても我慢したんだよ

生澤 夕菜 そんな れいみの気持ちわかっていた？

生澤 れいみ まちがったこと言ってる？

青井

生澤 なんで・・・だまっているの？ 夕菜

青井

生澤 夕菜 . . .

生澤 夕菜のうそつき! . . . 夕菜なんて嫌い!! . . . なんて
で こうなになるのだったら 夕菜なんかすきにならなければ良か
った . . .

青井

生澤は泣きながら階段を下りていった . . . 夕菜に振り向きもせず

れいみのクリスマスチャット

- - - いなは > 涙くん 今日ね わたしふられちゃった

- - - 涙 > どういうこと?

- - - いなは > うん いなはね 今日アイさんに呼ばれて いつ
もの待ち合わせ場所行つたの

- - - いなは > そしたら アイさん もう 私と遊べないってい
きなり言ってきたの

- - - 涙 > いなはさん なんかしただの?

- - - いなは > 何にもしてない . . . いなはは ずっと アイ
さんだけ見てきた

- - - 涙 > 俺は いなはさんだけしか 知らないから よく
わかんないけど . .

- - - いなは > だよ . . .

- - - いなは > わたし どうしちゃったらいいのかな?

- - - 涙 > 元気だしなよ

- - - いなは > ありがとう 涙君

- - - いなは > そういえば 今日クリスマスイブだね こんな
日にさびしいはなししちゃってごめんね

- - - 涙 > かまわないよ

- - - いなは > 涙君 いなかったら わたしどうか なっちゃって
いたかと思う

- - - 涙 > 気分変わるような 話しようよ . . . 元気になる

ような

- - - いなは < そうだね

- - - いなは < 涙君 クリスマスっていつも どう過ごすの？

- - - 涙 < 俺は 毎年家族といっしょだな まだまだ はず

かしながら 女の子とクリスマス いっしょってこと無いな

- - - いなは < いなはもだよ 今年は アイさんと 過ごせると
思っただけどそれかなわぬ夢でした

- - - 涙 < 気を改めて 来年に挑戦・・・ガンバ

- - - いなは < うんうんうん

- - - 涙 < クリスマスって いなはさんどんなものもらっ
りしますか サンタさんに

- - - いなは < さんたは いらないよ・・・わたしの家 暖炉ある

けど サンタさん 着たこと無い

- - - 涙 < ははははははは

- - - 涙 > じゃ ほしいものとか お願いする事ないんだ
- - - いなは < うんうん・・・いまは ほしいものと言うか ほ
しい 願い事あるんだけどな

- - - 涙 < アイさんの事

- - - いなは > いや 違う・・・前だったら そうだけど い
まは 違う

- - - 涙 < やはり 願わないと かなわないよ 何事も

いなは < そうだね 聞いてくれる？ いなはの願い事

- - - 涙 < いいよ

- - - いなは > いなはね・・・

- - - 涙 > 涙君と会ってみたい

- - - いなは > だめかな？

- - - 涙 > おたがい 知らないところが なんでも話し合え
ると言う いい事だし 会つと滅滅するよ

- - - いなは > それでもいい・・・こんど会ってくれる？

- - - 涙 > うん・・・少しだけ考えさせて・・・

- - - いなは >わかった 返事まってるね

涙 >俺 年末は旅行に出かけるので 次回は 一週開いて
再来週の同じ日でもいいかな？

- - - 涙 >うん かまわない じゃ その日に同じ時間にま
ってるね

- - - 涙 >では、ちょっと早いけど 一緒に・・・メリーク
リスマス そして、よいお年をお迎えください

- - - いなは <涙君もね よいお年を

- - - 涙はチャット部屋から退室しました(2005-12-X
X-X X:X X)

遊園地前

青井 おそいな〜光 どうしたんだろう？

青井 約束時間・・・もう 2時間も遅れている 電話もつながら
ないし

青井 仕事が詰まっているのかな

青井 電話ぐらいしてくれてもいいと思わない？ そのお兄さん
男？

青井 仕方ないな〜 ここが見える その喫茶店に退避していよう

喫茶店

青井 すみませ〜ん あったかココアひとつ お願いします

店主 かしこまりました

青井 マスター テレビチャンネル変えていいですか？

店主 いいですよ・・・そこにリモコンありますからご自由に

青井 たまには ちゃんとしたニュース見ないと 時代に乗り遅れ
るからな

チャンネルを 次々変えている夕菜

青井 どこもかしこも クリスマス一色だな 日本の景気がこんな

に悪いのに クリスマスだけは特別だ

青井 あれ？ 光るがテレビに出ている

記者 こちらは さくらのホテル 今回タレントの御堂光さんの
衝撃の婚約発表がおこなわれ こちらに設けられた 記者会見場には
各局の記者が 御堂光さんの到着をまだかまだかと 待っています

青井 光るが婚約？？

ポリュームを大きくする夕菜

記者 あっ ただいま 御堂光さんが 記者会見場に入ってまいりました

一斉にフラッシュがたかれる記者会見場 光がマネージャーといっしょに席に着く

マネージャー 各局の記者の皆様 突然の記者会見にお集まりいただいて ありがとうございます

今回の婚約記者会見は 御堂の方から 報告ならびに質問を受けさせていただきますので
いします よろしくお願

光は立ち上がり 婚約記者発表をおこなった

御堂 みなさま 本日は私の婚約記者会見におこしいただきました
ありがとうございます

御堂 本日 私 御堂光は 皆様に婚約の発表をいたします

記者 お相手は 前回スクープされた ドラマ共演者の山見聖歌さんなのですか？

マネージャー 改めて 御質問のお時間はとらせていただきますので
しばらく御堂の報告の法をお聞きください

青井 なんて？？

夕菜はなにがなんだか解なくなっていた

御堂　まずは 私の婚約者をご紹介します 高坂沙織です
紹介と同時に 歌手の高坂沙織が部屋に入ってきた

青井　高坂さん……

御堂　御承知かと思いますが 詩織さんとは 仕事の面でも大変お世話になり これからは 私の公私共にのパートナーとして 協力して行こうと思いい 結婚をする事になりました

高坂　高坂詩織です よろしくお願いします

詩織は　短い挨拶だけをして 席に着いた

記者　前回のお相手と思われた 山見聖歌さんとは？

御堂　前回報道された内容は まったくの虚偽でした 彼女に関しては あくまで仕事仲間としてのお付き合いだけです また、改め

ての仕事の打ち合わせのことでしたので
マネージャー　ここからは 私が……ご説明いたします 前回の報道に関して 山見さんの事務所の了解を得まして 私どもの事務所が 黙秘をしていた事は お詫びもうしあげます 山見さんの事務所サイトも 今回の婚約につきまして ご協力いただいたことに
関しまして この場を借りお礼申し上げます

菜は　もう ほとんどテレビの二スを見ていない 出されたココアにも口をつけず 喫茶店を後にした

青井　なんだったんだろう……もしかして 夢?? 光と高坂さんが 婚約だなんて……

青井　クリスマスにこんな事聞くなんて……

夕菜は　家の方に 歩き始めた 遊園地のネオンも まったく夕菜の目には入らなかった 遊園地の方からは 高坂の歌「未来に輝

いて」が聞こえてきた

第9章 師走（しわす）／極月（ごくげつ）の章（後書き）

9章までお読みいただきありがとうございました

また10章でお会いしましょう

第10章 睦月（むつき）の章

第10章 睦月^{むつき}の章

れいみチャット

どうしても会いたいと告げる

会いたいが 涙の反応は冷たいきがする 問い詰めても 答えてくれない

いなは >こんばんは。今日は涙君に提案があります。

涙 >こんばんは……えっ、何？

いなは >せっかくの新年なのだし、二人でOFF会しませんか？

涙 >えっ？オフ会ですか……ちやっとより大変そうだよ

いなは >難しく考えないで、ちよっと逢って楽しくお茶しましよ
うと言ってるだけだから。

涙 >うーん でもさ……都合つけないと いけないこともあるし

いなは >お金の心配とかしているなら大丈夫。いつもお世話にな
って居るんだし、いなはが払いますから。

涙 >いや お金の事ではないよ……

いなは >お願いだよ。涙君にひと目逢って見たいの。

涙 >俺 あんま 好きじゃないんだよな そういうの

いなは >そんな事言わないで、よくネットでもオフ会って聞くで
しょう。あれと同じだよ……全然変じゃないよ。

涙 >わかんないとおもうけど……色々考え方あるだろ
チャットの利用の仕方って チャットで知り合って 会いたいとい
う人たちって……

いなは >そんなの変だよ……涙君の偏見だよ……なら、ちよっと
あうだけならどう？

涙　　> 俺　ちよつと用事ができた　ごめんね退室する

いなは　> ちよつとまつて　涙君……

涙　　> おつかれさま

涙はチャット部屋から退室しました（2006-01-XX-XX：
XX）

いなは　> あつ　いつちゃった　どうしよう？

雪の日の逃避行

夕菜はサマーキャンプで恋人になった　彼氏は別の人と婚約をした
相手からもなんの説明の無いまま　夕菜には　もうどうしようも
なかった　自分のおろかな行為　間違つた人を信じていた事　夕菜
は、はじめての失恋をした　夕菜はどうしようもなくなり　ひとり
家を出て　どこか旅行しようとした……今の気持ちが落ち着
くまで　一人でだれにも言わなくて……でも　一人の男が　ど
こで知つたかわからないが　雪の中　夕菜のまえに現れた

逃避行台本　柊の結婚式を笑顔で迎えるため最初にエンディング
雪の降る商店街を　夕菜は一人駅前のバスターミナルに向かった
いまの彼女には　まちの音もぜんぜん聞こえない　夕菜は自分がこ
れからどこに向かうかも　考えていないのだろう　はじめての恋
はじめての失恋　そんな想いが　次々に彼女の頭に想い浮んでは消
えていった　夕菜は　か細い独り言を言った

青井「あるとき　あんなこと……」

青井「信じていたのに……」

青井「私　馬鹿だった」

青井「なんで　あの時……なんで……なんで……
……」

明るい時の夕菜を知っている人　だったら　きっと　今の夕菜を想
像できないだろう

バス停には一人も並んでいない……夕菜がこの世界に一人だけ　取

山本「夕菜」 「夕菜」 「夕菜」 行くなよ」

山本「夕菜、いくなよ、行くなよ」

青井「康介どうしたの？　大丈夫……」

山本「どうして？ 誰にも言わなくて行くとするんだよ．．」

青井「・・・・」

山本「どうしてなんだよ・・」

青井「・・・」

バス運転者「行くのですか？　そろそろ出発しますよ　急いでください」

運転手がそう言う　夕菜は　康介の元から立ち上がり　バスに乗り込もうとした　しかし　康介は夕菜の手をにぎりしめ

山本「運転手さん出発してください 彼女は行きません」

運転手は バスのドアを閉め 走りだした バス停に残るのは 二人きり 改めて夕菜は 雄介の元にひざまずき・・・

青井「どうして君がここにいるの??」

山本「志保から電話あつて 夕菜が家に 帰つてないから 俺が
知っているかと 電話があつたんだよ 学校に行つても居ないし
商店街の向こうで 夕菜の姿が見えたので追いかけてきたんだよ」
夕菜「うんうん」

山本 「すごい心配したよ 夕葉・・・俺がいるよ 俺じゃだめか？ お前の近くに居るのは・・・」

雄介のその言葉をきいて　夕菜は　康介の胸に飛び込んでしまった
青井「康介　わたし・・・わたし・・・わたしね・・・」

山本「いわなくていいよ」

夕菜「わたしね・・・」

山本「夕菜　いわなくていいよ　みんな知っている」

山本「俺さ　夕菜のことずっと見ていた　入学式からずっと　文化祭も　体育祭も　はじめて彼氏できたときも　ずっと　ずっと　ずっと・・・」

夕菜は思い切り　康介の胸で泣いた・・・もう　雪の後か涙の後か　解らない位に泣いた・・・

青井「なんで　なんで　なんで・・・いつもそうなんだよ　君は・・・君ってやつは　一回もそんなそぶり　見せてくれなかったじゃん」

山本「うん　俺　勇気が無かった　夕菜と友達なら　いいやと　自分に嘘をついていた・・・ずっと　言いたかったけど　夕菜幸せならいいと思っていた　夕菜が笑顔見せてくれればそれで　いいと思っていた」

・夕菜「なんで・・・なんでなんだよ」　こんな私の何処がいいんだよ　わがままで　すきなことやって・・・君の気持ちは少しも感じてなくて・・・こんな　わたしの・・・」

山本「そんな　夕菜だから　俺　好きなんだよ・・・見守っていかないと　いけないと・・・」

山本　こんな　夕菜　ほっとく事できないだろ

青井「こんな　こんな　こんな　私なのに　君に・・・」

山本「もういいんだ・・・いま　夕菜がここにいてだけで・・・いつもの　夕菜に帰ろう」

青井「また　そんな事いう君は」

青井「わたしね　わたし　気がつかなかったの　すごく近くにあった気がつかなかったの　君のことが・・・」

山本「うんうん　だれもが　自分で自分の背中がみえないよ・・・」

もう 帰ろう夕菜」

夕菜が 立ち上がると ちょうど 康介の顔が 夕菜の顔の前にあった

夕菜は それが自然の行為とおもい そっと 目を閉じた・・・慶介は 今度こそはと 夕菜のくちびるにそっと 口付けをした・・・夕菜のくちびるは・・・涙の味がすこした・・・いつの間にか ふたりを祝福するように雪がやんだ

二人だけの結婚式

神父「今日はどうなさいましたか？」

緑川「はい…実は俺たち、ここで結婚式を挙げたいんです」

神父「あなたたちはまだ学生ではありませんか」

緑川「学生だと結婚式は挙げてもらえないんでしょうか」

柊「私たち、どうしても結婚式を挙げたいんです」

神父「困りましたね。…何か、わけがあるとお見受けいたしますが？」

緑川「…神父様もご存知だと思えますが、夕陽…彼女は妊娠してるんです」

神父「ああ、例の…」

緑川「どうしても結婚式を挙げたいんです！お願いします！」

柊「お願いします！」

神父「学校側としては結婚式を挙げることは許可できませんね。ましてや緑川君、きみはまだ入籍可能な年齢ではない」

緑川「…そうです…よね……………」

二人は諦めて帰ろうとした。その時、神父が静かに口を開いた。

神父「神の御前ではみな平等と聖書にも書かれています」

訝しげに振り返る二人。

神父「学校としては貴方たちの挙式は認められません」

淡々と言う神父に、夕陽は吹っ切るように小さくため息をついた。

柊「しょうがないよ、諦めよう……私、この教会好きだけど、神

父様をこれ以上困らせちゃいけないよね」

しかしその場の空気を暖めるように優しく、神父は続けた。

神父「ですが……私個人がお二人を祝うということであれば、神もお許しくださるでしょう」

そう言々と神父は夕陽を見つめ、にっこり微笑んだ。

柊「神父様……」

緑川「……ありがとうございます！」

神父は二人を祭壇の前まで誘導し、聖書の一節を読み上げた。

神父「たとえ自分の全財産を人に施しても、また自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益である。」

神父「この言葉を、あなたたちに贈りましょう」

二人は顔をあわせて静かにうなずいた。

神父「私の後に続いて、宣誓の言葉を。『私たちは夫婦として順境に会っても逆境にあっても』」

緑川・柊「私たちは夫婦として順境にあっても逆境にあっても」

神父「健康のときも病気のときも生涯互いに愛と忠実を尽くすことを誓います」

緑川・柊「健康のときも病気のときも生涯互いに愛と忠実を尽くすことを誓います」

神父「では、新郎新婦は互いの手を重ねてください」

神父は二人の重ねた手の上に、そつと自らの手を添え祝福の言葉を述べた

神父「ここに、新郎……輝さん、新婦……夕陽さんが夫婦になったことを宣言します。賛美歌430番の斉唱を」

妹背^{いもせ}をちぎる^{いえ} 家のうちわが主もともに いたまいて父なるかみの
御旨^{みむね}に成れる祝いのむしろ 祝^{いそぐ}ませ

賛美歌を胸に刻み込むように歌う二人。やがて後ろから二人のものと
とは違う声が重なっていった。驚いて振り返ると、友人たちが集ま
っていた。

青井「おめでとう。輝、夕陽」

琴葉「二人だけじゃないよ。私たちもいるよ」

山本「俺たちを忘れるなんて水臭いぞ」

青井「ほら、夕陽。忘れ物だよ」

差し出されたのは、急ごしらえであろうブーケだった。夕陽の目か
ら、堪えていた涙が一気に溢れ出した。

柊「ありがとう、皆……ありがとう……ありがとう……」

愛のいしずえ かたく据^すえ

平和のはしら なおく立^たて

かみの みめぐみ 常^おに覆^おえば

さいわい家^{いえ}に 絶えざらなん

第10章 睦月（むつき）の章（後書き）

第10章までお付き合いくださいましてありがとうございます

第11章 如月／更衣（きさらぎ）の章

第11章 如月／更衣きさらぎの章

れいみは チャットにこなくなった 涙君に メールを出した
涙さんへ・・・メール送信 From いなは

・・・こないだはチャットでつつい熱くなってしまっごめんな
さい。

・・・最近メールをもらえなくなっ寂しいです。

・・・まだ怒ってるのかな？

・・・きちんと謝りたいし、涙君とまた、お話ししたいので

・・・よろしければ2月×日の20時にいつものチャットルームで
お待ちしています。

返信メール

・・・「Sorry, no mailbox here by
that name. vpopmail」

・・・れいみの元に 自分が書いたメールの文章に 一行 相手の
アドレスが存在しないとの一行が文頭に書かれた メールが届いた

生澤日記

・・・涙君、このページを見ていたら返事をください。

・・・こないだはチャットでつつい熱くなってしまっ

・・・ごめんなさい。

・・・無理に逢いたいと言っごめんなさい。

・・・でもね、いなはが涙君に逢いたいという気持ちもわかってく
ださい。

・・・” 今、いなはを支えてくれるのは涙君との遣り取りだけなん
だよ。”

- - - もう、これつきりじゃないよね？
- - - メールしても返って来ちゃうし……
- - - こんな生殺し嫌だよ！
- - - お願いだからメールください。
- - - 学校へも行かないで、毎日メールの返答を待っているんです。
- - - お願い……
- - - 信じて待っています。

夢の人

朝のミーティングのとき クラスのみんなは先生から 生澤が自殺未遂をしたことを告げられる
本人の希望で夕菜にきてほしいと 言われる 夕菜は一人では心細いので

みんな 生澤の見舞いに行きたがったが 親友であるグループの二人が 会いにいくことになる

生澤部屋

夕菜と健吾が お母さんの案内で れいみの部屋に入ると れいみは 眠っていた

しばらくすると 気がついたようで れいみは 起き上がろうとする
青井 「れいみ 起きちゃだめだよ そのまま ねてな」

- 生澤 「あつ夕菜……それに 黒岩君……」 すこし かぼそい声で 夕菜たちにはなしはじめた

青井 「ごめんね れいみ あの時 私が君に あんなこと言わなければ」

青井 「わるいのは みんな 私なんだね」

生澤 「夕菜 なに勘違いしているの？ 夕菜のせいじゃないよ」

青井 「でも……」

生澤 「今日さ 夕菜に来てもらったのは 夕菜だけには説明しないといけないと思ったの」

生澤 「心配かけちゃって ごめんね」

生澤 「れいみ・・・自分でもなんて あんなことしちゃったんだろうつ おもう」

生澤 「ぜったいにだめだとわかっていたのに・・・」

青井 「うん 君が 生きてただけで わたしうれしい 謝ること無いよ」

生澤 「あのね・・・」

黒岩 「オレ・・・でていこうか??」

生澤 「いや ここにいて 一緒にきいてて・・・なかまじゃん」

生澤 「そうする事で わたし 立ち直れると思うの・・・」

生澤 「れいみ どうしても ある人にあいたかったの」

青井 「ある人?? 前に話していた人？」

生澤 「うん でもね・・・その人 あったこと無い人なんだ」

青井 「あったことないひとつて いわれても 意味がわかんないよ」

生澤 「れいみが ホームページに日記をかいていることは 知っているよね 夕菜は・・・」

青井 「うんうん でも わたし パソコンできないから みては いないけどね」

生澤 は そう言うとき起き上がって パソコンにいかうとする

青井 「おきちゃだめだよ」

生澤 は 夕菜にとめられて・・・起き上がるのを止めた

生澤 「ちつと そのパソコンの電源入れて・・・そして ○

□×を・・・」

青井 「えっえっえっ・・・??」Σ(。○。一一一)

生澤 「まえにおしえたじゃん・・・」

青井 「完全にわすれてます」Σ(「□一一一」)

黒岩 「オレがやろうか・・・いいか 生澤」

生澤 「いいよ」

健吾がパソコンのスイッチをいれて ホームページを見る機能を立

ち上げると そこには 生澤の日記を書いているページがあらわれた
黒岩 「・・・・・・これって!!」

青井 「どうしたの 健吾??」

黒岩 「いや なんでもない」

生澤 「それが れいみの 日記を載せているページなの 名前は
違うけど 夕菜のこともかいてあるんだ」

青井 「・・・・・・」

生澤 「でね・・・その 日記をみた 男の子が れいみにメール
を送ってきて れいみ そのこと仲良くなったの」

- 生澤 「学校で言えない事とか その人は とてもやさしく 相
談にのってくれたの である程度 二人でそんな時間を共有して
いたら わたし この人に恋したみたいなの」

青井 「それで その人に会いたくなっただ」

生澤 「うんうん でもね その人 会ってくれないんだ れいみ
がどうしても会いたいといっても」

青井 「そうなんだ・・・」

黒岩 「その人に 本当に会いたかったんだ・・・??」

生澤 「うんうん・・・でも あってくれない・・・だから自分
でも解らないうちに こんなことしちゃったんだ」

黒岩 「生澤 夕菜 ごめん・・・オレしらなかつたんだ」

青井 「??????」

黒岩 「日記の子が 生澤だったんのも 生澤がその子に恋してい
たのも その人のせいで こんなことになるなんて」

青井 「どういうこと・・・??」

黒岩 「その男って オレなんだ」

青井 生澤 「!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

青井 「どういうことよ・・・??」

黒岩 「オレ パソコンやっているのは しっているよな あると
き この日記のサイトをみて なんとなくメール出したんだ 普通
に感想を書くみたいに」

黒岩 「そうしたら メールが帰ってきて それから 生澤がしつ
ているように ネットで あそぶようになったんだ」

黒岩 「別にふざけていたわけじゃないけど いや 逆に その子
にたいして 共感がもてるので 付き合ってきたけど」

黒岩 「ネットで遊ぶのと 会うつて事は べつもんだいだとおも
っていたんだよな」

黒岩 「いくら ネットで仲良くなっても 会うとなると・・・」

青井 「わたしは パソコンしたこと無いので よくわかんないし」

黒岩 「それが こんな事になるなんて 考えたこともなかったよ
俺」

男は 突然の出来事に・・・どうしていいのかわからなくなった

夕菜は そこにいてはいけなとおもい 立ち上がり

生澤 「夕菜どこいくの？」

青井 「うん れいみのお母さんのところにいつて のみものもら
ってる すぐ帰ってくるよ」

生澤 「あけがとう すぐ帰ってきてね」

青井 「うんうん」

というと 夕菜は部屋をでて 台所の方にいそいだ

黒岩 「おれ・・・」

黒岩 「ごめん・・・おれが」

生澤 「黒岩君・・・」

生澤 「いや ちがうな・・・」

生澤 「はじめまして 涙君・・・」と 彼女は笑顔で男の使ってい
る ニックネームで呼んだ

生澤 「ようやく 会うことができたね・・・でもおどろいちゃっ
た 黒岩君が 涙君だったんだもの」

黒岩 「オレもさ・・・」

生澤 「気にしないでいいよ 涙君が わるいんじゃないよ・・・
だけでも そう思うよね 女の子が会いたいといっても・・・へん
な 女の子とおもわれるよね」

黒岩 「そんなことないけど」

生澤 「いいの 会えただけで れいみはうれしいよ」

生澤 「でもね．．．それよりもっと大事なことがあるんだ」

黒岩 「うん」

生澤 「それは 同級生だったということ だって 日記に誰のことかいていたか みんな解っちゃったしよ」

生澤 「知らないひとだったら 日記のこと知っても 誰のこと書いていたか わかんなかったし」

生澤 「夕菜のこといっぱい書きちゃったでしょ．．．秘密ももつてくれれば れいみ なんともおもってははいないよ」

黒岩 「そうだね オレ誰にも言わない．．．絶対に 約束する．．．」

生澤 「ほんとうに」 （「」とれいみは 疑りぶかい目で 男のことを見た）

黒岩 「そんなめでみるなよ オレ絶対に言わない 男に誓って．．．」

生澤 「信じるよ．．．その代わり．．．」

黒岩 「??」

生澤 「れいみ あなたに付ききりになるけどいい?．．．ちゃんと 監視してないかね．．．」

黒岩 「．．．．．」

黒岩 「うん．．．」

夕菜が 手にお菓子とジュースを持ちきれないほど もって 部屋に入ってきた

生澤 「夕菜 そんなにたべると 太るよ」

青井 「君にいわれたくないぞ．．．．．」

生澤 「夕菜 きいてきて．．．」

青井 「??????」

生澤 「黒岩君が．．．れいみの召使になっってくれるってさ．．．」

青井 「それはそれは おめでとつございます お嬢様・・・」

黒岩 「・・・・・・・・・・」

青井 「ところでさ・・・どんな日記書いているのみていい・・・さっきの話だと 私のことがいてるっていつてたし??」

生澤 「だめ~~~~!!」 (*) b

青井 「けち〜みちやうもーーん 今ならパソコンいじれない

夕菜さまでも見ることができ」 (*) (ノ”

生澤 「涙君・・・夕菜をとめて~~~~」 (*) b 「とれいみ

は 男のニツクネームで叫んだ

夕菜も本気で見る気は なかったが・・・日記より二人に笑顔を見れたことがうれしかった。

第11章 如月／更衣（きさらぎ）の章（後書き）

11章までお読みいただきありがとうございました

第12章 弥生（やよい）の章

第12章 弥生^{やよい}の章

author : 青い羽飾り

生澤の伝説

まだ朝日が昇ったばかりの日差しに照らされた桜の木の下に二人はいた

黒岩 「いよいよ俺たち、二年生になるんだよな…」

生澤 「そうね」

黒岩 「どんな一年になるかな」

生澤 「楽しい一年になるといいね」

黒岩 「うん」

生澤の手には、包帯がまだ巻かれている

生澤「馬鹿なことしちゃったな…でも、これのおかげでこの人に会えたんだもの…神様、今度はメールでなく言葉でこの人に自分の気持ち伝えていきます」

と心につぶやくと、そっと包帯に手を当てた。その手に一枚の桜の花びらが落ちてきた

それきり二人は黙って朝日の当たる桜の木を見上げた

大きな桜の木はたくさんさんの愛を見てきて、これから、もっとたくさんさんの愛を見守っていくだろう

夕陽 輝の二人の伝説

ひらひらと舞う花びら。今を盛りと咲き誇る桜の木の下に二人は立っていた。

終 「ねえ輝くん知ってる？この大樹、”愛の実る木”って伝説があるんだって…」

その時、かなり大きくなり目立ち始めた夕陽のお腹に、一枚の花びらがふわりと乗った。

柊 「え???今の!? あ!赤ちゃんが動いたよ!!」

緑川 「天使が挨拶しに来たんだよ」

柊 「天使!?この子に...ってこと?」

緑川 「伝説なんだろう?」

柊 「うん、そうだね!...いつかこの子も、ここで伝説の人に会えるのかな」

緑川 「ああ、きつとな」

桜の大樹を見上げる二人。輝はそっと労わるように夕陽のお腹に手を伸ばした。

緑川 「俺たちの子供か...まだ実感わかないなあ...」

柊 「んもう!ちゃんとここに、赤ちゃんいるんだからね?しつかりしてよね、パパ」

緑川 「大丈夫だよ。夕陽にはいつも笑っててほしいって言っただろ?俺、夕陽がいつでも笑顔でいられるように頑張るからさ」

夕菜の伝説 基本完結

二人は夕方の伝説の木の下にいた。夕菜は髪の毛をショートカットにして、少し大人っぽく見える

青井 「もう寒くなってきたね」

山本 「うん...これからすごく暖かくなるよ」

青井 「あなたが私の前に現れてくれたとき...なんだか天使に見えたよ」

山本 「そうかな」

青井 「あのときあなたが迎えに来てくれなかったら、多分いまこの木の下に私はいなかったと思う」

山本 「そうか」

青井 「私たちにも新しい一年が、もうすぐ始まるね」

山本 「うん」

青井 「そろそろ夜行バスが出るよ。急がないと」

山本 「今度は逃避行でなくて、二人だけの旅立ちがここからスター

トだ」

青井「うんうん！また、笑顔でみんなに会えると思う」

山本「切符はちゃんとあるか？」

青井「うん、あるよ。ここに二枚」

と夕菜がバックから切符を出した。その上に一枚の桜の花びらがそつと乗った

ベンチに座って 日記を書いている志保

琴葉「今日で 私たちの一年終わりか」

「色々あったな　みんなと　また笑顔で合えるかな」

そのとき 風が吹き 一枚の花びらが 志保の日記の上に 飛んできた

琴葉「あつ　かわいい　花びらだ」

志保は日記の上の花びらをそつと さわり

男 「おお　い　おいていくぞ」

琴葉 「まってよ　いま、いく」

日記をかばんにしまうと 校門のほうに走っていった

第12章 弥生（やよい）の章（後書き）

最後までお付き合いくださいまして ありがとうございます

よろしければ評価をいただければ幸いです

ありがとうございました

次回作にお会いいたしましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4654c/>

スケッチブック

2010年10月21日02時08分発行